

の歌は大抵詩趣を缺くか又は甘つたるい。また説教に至つては、修辭的であつたり辯證的であつたり、哲學的であつたり、空語であつたりするのみならず、論争的にして憎惡の念に驅られてゐる場合すら必しも稀ではない、従つて理知と意志とに訴へる、もしくは信徒の胸中に、總じて神を禮拜する席上に於て抱いてゐてはならぬ様な感情や激情を起さしめるのである。——我等を *erbaunen* (*edify*) すること、即ち精神的に興起せしめ、慰藉し、世俗生活と世俗に對する愛惜の念とから釋放すること、世俗の眠から搖り起しさうして神の方へ引上げること、この事はかくの如き書籍や演説の到底能くせざる所である。——第十七、八世紀の佛蘭西に於ける大説教家等や亦シユライエルマ、ハーの説教の如きは、美文學としてまた雄辯術の典型としては私も慥に驚歎することが出来る、けれども私の魂や宗教的情操は彼等を讀んだがために暖かさを増しはしない。——中世神祕家の著作の中にも私は成るほど意味深遠にして往々人を魅する如き哲學を見出しはするが、しかも私の宗教的道德

的生活に應用し得る如きものは尠い。既にその思辨的性質及びそれと關聯せる晦冥と難解との故に、是等の神祕主義的著書は慰勵書と呼ぶことは出来ぬであらう。慰勵書は共同的所有物たり得るものでなければならぬ、それは『懷郷病』<sup>ハイムウエー</sup>に惱める人間に向つて此世の迷路からの出路を指示しさうして彼をば最も近く且つ最も確かな道を通つてその『故郷』に連れ行く如き、簡單なる、何人にも了解し易き生命の詞や生活上の規矩やを含んでゐなければならぬ。——慰勵書なるものは生涯を通じて私の『指導者』、私の精神上的の *Vademecum* (道案内)、私の *eyxepi'diow* (*Handbüchlein* 袖珍書) でなければならぬ、然るに基督教世界に於ては、既に言つた通り、私は『基督の追隨』以外のものを知らない、また其故にこの唯一無二の書は私の生涯の伴侶 忠言者及び不斷の道連れの中に數へらるべきものである。

私は *Erbauung* (*edification*) なる概念を普通行はれてゐるよりも遙に廣義に解し、それをば決して、獨り教會や教會的基督教が約束しまた屢々實際に與へもするとこ

ろの、慰藉や精神的鼓舞のみとは解しない故に、私にとっては慰安書や、祈念書やまた慰勵書や、祈禱書や『カテキズム』や宗教的・道徳的『袖珍書』や説教集や其他同種類のもは基督教以前及び以外の且つ教會以外の世界にも亦在るのである。私は例へばエピクテトスの『道徳訓』(Encheiridion)の如きは私にとつては、普通日毎の讀物として基督教者に勧められてゐる慰勵書などよりも遙に大なる價值を有すること、又クレアテス作『ヅェウスへの讚歌』<sup>ロマス(一)</sup>はかのアンブロジーウスの作れる讚美歌(„Te Deum Laudamus“『主よ、我等は汝をたゞへまつる』)よりも遙に多く私の心を動かし又引上げてくれるといふことを自白する、また私にして若しこの非常に見事なる讚歌をば教會の祈禱や讚美歌集の中に見出したとするも、私の基督教的感情は寸毫も傷けられるやうなことは無いであらう。——私はかく考へ且つ感ずるが故に、私の生涯の伴侶や不斷の道連れやまた宗教的並に道徳的忠言者たるべき人の數は極めて多い。私はさういふ人々をば、私の通じてゐる國語を母語とせる總ての

國民の間において、すべての時代に於てまた總ての宗教の信者の間に於て見出すのである。その神を呼ぶに、一つの宗教はジュピターを以てし、他のものはブラーマ、世界精神、世界心靈、萬有の父もしくはアラー等を以てするも、それは私を迷はしむるに足りない。『アラーが持てる百の異なる名を呼ぶとき、その度毎に』唯一者の『名の餘韻が響く』(„Wenn ich Allahs Namenhundert nenne, Mit jedem klingt ein Name nach“ für den Einen. Goethe, West-östl. Divan, Buch Suleika.) — また書物は私の『魂の糧となる』(„erbanen“) ためには、必しも常に何か新しい事また向上せしめるやうな事を言つてくれなくとも好い。私が若しその中に神や世界やまた人生に對する私自身の思想や或はまた私にとつて親愛すべく且つ價值多き『空想』<sup>フアンタジー</sup>やを見出すならば、然らば他の精神(人)との思想上のこの符合は私を鼓舞し、力強くする、さうしてその精神が非凡であればある程、また私の見解と大多數の人々のそれとの間の懸隔が大であればある程、その度は一層高い。即ち私は最早、世の中が

寂しいとは思はず、自分は決して人々から孤立してはゐないのだとの感じを持つやうになる、私は實に一個の支柱と一人の伴侶とを得た譯で、彼のより大なる力は私のより弱小なる力の中に流れ込み、私をば一層抵抗力ある者となし、また勇氣と自信とを以て私を充たしてくれるのである。それで例へば無信仰、物質的にして、基督教に背ける今の世界に於て、ヒルティの如き、その宗教並に人生に關する見解の私のそれらに極めて縁の近いところの、著作家に邂逅したといふことは私にとつては大なる幸福であり且つ慰藉であつた！

(一) クレアンテスはストア哲學の創始者キツテイオンの人ツエノンの後を襲うて同學派の長となつた人で、その作『ヅエウスへの讚歌』は古ストア哲學を知るに最も重要な資料たるのみならず、猶また一般に最も美しい祈禱の一つに數へることが出来る。今こゝに参考のためにこれを譯出すれば次の如くである。この讚歌の希臘原文はユーバーウエーヒの哲學史にも出て居る。

『死なき者の中の至高者、多くの名もて呼ばれる者、とこしへの全能者、ヅエウスの神よ、法のまに／＼天地しるしめす自然のいと高き主よ、われ汝に敬禮す！ げに御名を呼びまつるは

死すべき者皆の務なり。地の上に生き、動ける造られし者皆のうち、汝より出でしは御聲の模寫(神の詞を模倣する能力)恵まれし我等のみなればなり。さればわれ汝を讚美せん、とはに御權能御權能たへまつらん。

げに地球の周圍廻るこの萬有は汝の導きのまゝに動き、かしこみて汝に従ひまつるなり。汝がその侵し難き手に持ち給ふ武器電光はいと物凄し、雙刃もち、燃えつゝ永遠に動くその閃光は自然のうちなる物皆を怖れ戦かしむ。これによりて汝は普通の理法を維持し給ふなり。理法は萬物を貫き大いなる又小さき光の中に入る。この法によりて汝は稜威いや増し萬の物の上のいと高き王とはなり給へり。御意御意ならでは如何なる業も起り得じ、おゝ神よ、地の上にも、聖きみ空にも、海の深みにも、一惡しき者らが愚しくも爲すところ除けば。されど汝は過度(又は奇數)を適度(又は偶數)となし、醜を美となすことを知り給ひ、且つ好ましからぬものも汝には好ましきものなり。汝はいとみじくも總ての善を惡と一つに結びつけ、萬有に遍きとこしへの理法を生ぜしめ給ふ。されど惡しき人等はそを遁れ避けんと努む。憐れなる者等は常に善を求むれども、普通なる神の法に對しては眼も耳も持たず、これに従へば理にかなへる氣高き生を送り得るものを。彼等はその賤劣の故に一つの禍より他の禍へと飛込む——或者は名揚げんとて熱心の餘り争を始め、或者は厚顔に無遠慮に利を追ひ、また他の者は静かなる處に退きて身を養ふ。

しかはあれど萬有の施與者、黒雲の中に座し給ふ者、稻妻閃かす者、ヅエウスの神よ、憫むべき無

智より人間を救ひだしたまへ、そを、父よ、彼等の魂より除き給へ、正しきをもて萬有しろしめす御智慧を彼等に頒ち與へ給へ、さらば我らは、死すべき者にふさはしきが如く、絶間なく御業たゝへて、汝の授け給ひし榮を榮もて報いまつらん。げに人にも神々にも、何時までも普通の法をふさはしきが如くに讚美するにも増して大いなる恩寵はあらざるなり。』

世間から、常軌を逸したる、風變りの、古風な畸人若しくは愚人として嘲笑されることを恐れるが爲に、己が信念や所見やまた経験や、否、更に進んでその『空想』や『夢』想』をも秘するといふことは、これ實に丈夫にふさはしからざる薄弱と怯懦であつて、同時に虚偽の誇と人間知識(人間といふ者を知ること)と人間愛との缺如せることを語るものである。かくの如き恐怖は眞に偉大なる人々の毫も知らなかつたところである。さうして彼等は最も怪奇なる見解といへども、一たびその眞理なること及び人類に對するその價値を信じた以上は、それ等をば常に自由に大膽に公言して憚らなかつた。歴史は此事を證してゐる。凡そ宗教や哲學における、藝術

や科學に於ける進歩なるものは是れ皆、その初めて世間の舞臺に現れた時には「愚人」と做された人々の賜物なのである。

嘲笑されるといふことは、「愚人」にとつては何の害にもならない。然るに彼が自己の『愚昧』を隠蔽することなく、世人の意見を顧慮せずして只管自己の『愚かしき』考へ方並に活き方をば明らかに忠守すること、—この事は精神上彼に縁近き、しかも氣の弱き又その氣の弱きことの爲に惱める『愚人等』に役立つことが出来る、蓋しそれは、彼等の『愚昧』をも亦逡巡することなく敢て世間の前に告白するの勇氣を起さしめ、依つて以て愚昧を擴布し又その歸依者を造りさうして遂にはそれを眞理として一般に承認せしむるに至るの効あるが故である。—されば眞理に對し又人間に對する愛の念から、誤れる羞恥を離れて、自分をば事實ありの儘に、「愚人」として、世間に傳へること、又恐るゝところなく世間に向つて戰を宣することは、これ正に『愚人』の義務と謂ふべきである。彼は亦、結局勝利を得る者は『愚人』であつ

て、『世間』ではないといふこと——これは恰もわが(獨逸)民話に於て、欺かるゝ者は愚人ではなくして、寧ろ悪魔であり、又『世間』を克服する者は『大愚物』: der reine Tor. [之はワーグナーの歌劇『バルシファル』の主人公のことに]であつて、世間は「愚人に」打勝たぬといふ風に物語られてゐるのと同じ事であるが——を屹度承知してゐる筈である。

哲學や藝術や又科學において私の愛好する殆ど總ての人々には、また私の心を特に惹きつけるところの、詩的空想の所産たる人物には多少の『愚昧』が附纏つてゐる、——思ふに之はやつぱり斯うあるより外はないのである、何故なら彼等は何れも傑出したる人物であり、従つて又常に『聰明』にして健全なる群衆には屬しなかつたからである。——私の愛好する是等の人々を私は凡そ次の如くに類別する。その一群を形造る者は私の師 (Meister) である、次に來る者は友人や助言者や伴侶や善良なる同窓者や僚友や快活なる話相手や朋輩等である。私はこれらの人々の何れからも

長くは離れてゐたくない、しかも其中の或者等との不斷の交り無くしては私は恐らく到底生きて行けないであらう。彼等は私の極若い時代から常に座右に在つた、さうして私が年齢を取れば取るほど、彼等は私にとつてはいよいよ益々缺くべからざる又貴く親愛すべき者となつて來るのである。

然らばそれは一體どういふ人々であるか。日本人の間における私の友人等は私に向つて屢々この事を訊くのである。それで私は既に一再ならずこの問に答へたに拘らず、なほ一度答へようと思ふ。蓋し人はその愛好するところのものに就いては好んで語るものである。

讀者は、私がここで、私の生涯の伴侶をすべて數へ擧げ之について文學史的、もしくは美學的批評的論文を書くであらうなどと恐れてはならない。この事は他の人々のもう疾づくに爲した且つ今なほ依然として爲しつゝあり、しかもまた私の到底及ばぬ程に好く爲すところである。私はかくの如き叙述は今のところ寧ろ多きに

過ぎはしないかとすら思ふ。少くとも私は例へばゲーテとかシラーとかの新しい傳記と批評的評價や、又新しい哲學史と文學史やを得たいとの要求は持つてゐない。惟ふにそれらの新著は、縦令更に二三の古い紙屑や、書簡や又日記やを發見したとするも、やつぱり我等の既に知れるところと本質的に相違せる如き事を説くことは出來ないであらう。一體死者がもと公にする積でなく、たゞ自分とその最も親近なる友人及び一族の者のために記して置いたやうな文書は、死者をば惡意ある若しくは愚昧なる攻撃に對して護り、彼のために『解嘲』を書くことが必要となつた時のみ使用すべき筈のものであると、私は思ふ。然らざる場合には死者等に對する畏敬の情は我等に要求するに、彼等の思出と彼らの意志とを尊重して、彼等をば獨りその明かに世間のために書いた著作に據つてのみ評價し、又その遺稿の中でも、著者自らも亦公にしたであらうといふことを我等が確知せる如きものゝみを公にすることを以てする。人間の——他人並に自己の——魂の隠れたる深處を掘り探ると

いふ事は竟に何者をも齎す所以ではない、何となれば凡そ魂即ち個性なるものは——それが自身のであつても尚——決して闡明し盡すことの出來ぬものだからである。その弱點や性格上の缺陷やを發見せんが爲に、偉大なる人格の生活や活動をば意地悪く嚴密に穿鑿するといふことは、これ實に憫むべき、優しみなき、(無恥と迄は言はずとするも)、無遠慮な、隱口を好むところの——すべて精神的に卓越せるものは兎に角蟲が好かないといふ種類の——人々の遣方である。然るにかかる短所は常に容易に見出さるゝものなるが故に、傳記作者や史家の矮少なる人格(Personchen)は特にそれらを高調し、さうして、かくする事によつて彼等の嫌忌する偉大がその玉座から引卸され、俗衆並に批評家と同地位に置かれ得るとの信念の中に下賤なる満足を感じるのである。——また自己について喋々することや及び一見謙遜なるが如くにして、しかも其實極めて自惚の強い且つ僭越な『告白』や、懺悔をすることや——文壇における是等の現象は私の嫌忌するところである。我等の徳にも缺陷にも全然

無頓着なる世間の前にかく自己の内部を曝露して見せるといふことは私には無恥と思はれる。それは一種の不純潔 (Unkuschheit) にして、高尚なる讀者をして不快を感ぜしめずにはゐないものである、又それがルッソーの『懺悔録』の形を取る時には、世に裸體露出病 (Exhibitionismus) 【全く常識を失し、人前にて恥づべき所を態と露出する一種の精神病】 と呼ばるゝところの精神病的現象に私はそれを比較せんとする者である。―もし萬人がかくの如く考へるとすれば、所謂『客觀的』歴史や又批評は不可能であらう、けれどもそれは總じて可能であるか。猶また、縦令それが可能であるとするも、それは果して必要であるか。この場合疑を挟む餘地はあると思ふ、又ゲーテの如きはこの疑をば屢々且つ斷乎として言明して居るのである。例へば彼はツェルター (Zelter) に次の如く書き贈つて居る (一八二四年三月二十七日)。「すべて歴史と名のつくものは實に奇異な不確かなものである、又、如何にして我等は遠く過ぎ去つた事件について動かざる確信を握らうなどと欲するかといふ事に想到すると、それは實際滑稽になつて來

る。』ゲーテは嘗て (一八二五年十月十五日) エッケルマンにかう言つて居る。『歴史的批評なるものは往々『貧弱なる眞實』を齎すことによつて、『我らにとつて一層價値あるところの偉大なるもの』を滅ぼすが如き舉に出る。歴史的批評は例へば、從來は我等を熱せしめ又感激せしめた、従つて我等にとつて一種の道德的並に美的價値を持つてゐた所のルクレーティアやムキウス・スケイヴァラの如き古羅馬の英雄的人物は決して實際に存在した者ではなくして、『羅馬人の偉大なる精神が作爲した』ところの作話に過ぎぬといふことを證示したと自稱して居る。『けれども一體かくも貧弱極まる眞理が我等にとつて何になるか！ 又羅馬人がかくの如きものを作爲し得る程に偉大であつたのならば、然らば我等も少くともそれを信ずる程に偉大であるべき筈であらう。』―私はオットー・ハルナックの書『完成期に於けるゲーテ』 (O. Harnack, Goethe in der Epoche seiner Vollendung. Leipzig. 2. Aufl. 1901) に對して讀者諸君の注意を促したい。この書には歴史や歴史的批評に對するゲーテ

の態度が多く且つ根本的に説かれて居る（例へば四三、四四頁、八三頁其他處々）。しかしそれは兎に角、本題に入らう！ 私は、特に最近私を慰勵し、元氣づけ、もしくは楽しませたところの唯だ僅少の者について語らうと思ふ。しかもまた私一個を惹きつける側からのみ彼等を觀察して見よう。他の人々は別の理由から又別の性質の故に、彼等を敬重し且つ愛好するであらう、—恐らくはまた毫もさうしないかも知れない。—

## 九

レツシング。

私にして若し幾分たりともわが年若き日本の友人等に影響を與へ得るであらうならば、私は彼等總て—取分け文筆に携はる者や教壇に立つ者—に向つて先づ第一にレツシングの研究を勸奨するであらう。また若し私が誰かを教育する位置に在つたならば、私は彼に命ずるに、何よりも先きにその形式的方面の—論理上、言語上、文章上の—及び宗教上、道德上の教授をば是非レツシングに就いて受けることを以てするであらう。彼にして若しこの事をしたならば、もはや彼は、それに對して自ら傾向（嗜好）を持てることを感ずる生涯の職業をば自由に選定するの資格を



得た譯である。茲に於てか彼は、何れの職業に就くも自ら行爲の士たることを證し、誠實な、自由な、高貴な、宏量な 神と人との快き眞の基督者たることを示すであらう。——弱點や過誤は、誰にもある如く、勿論またレッシングに於ても見出し得る、——けれども唯瑣々たる事に對する拘泥や、狹量にして精神の局限されたる、機械的にして卑俗なる點 [Philisterhaftes, Banaisches] 此の兩語は此處ではシノニムの積で用ゐてある。に至つては毫も見られない。彼の本性のうちにも、又その生活や思考の中にも機械的とか狹量卑俗とか呼ばるべき點の全然無いといふこの一事は、我等にして若し猶外にソクラテス、デカルト、スピノーザ及びカントの如き人々を有つてゐなかつたならば、レッシングをば實に哲學及び文學上の偉大なる人物中の無二者 (Unikum) となしたであらう。

わが(泰西の)偉人の中にも、レッシングが依つて以て私を惹きつける所の諸性質をば、彼に於ける程一も缺くるところなく一人にして兼備せる者を私は他に知らな

い。それは即ち人格の高潔、矜持ある個人主義、思考の上にも行爲の上にも認めらるゝその王者の如き獨立不羈の態度、何者をも怖れざる最高度の率直、あらゆる人眼を忍ぶ抜け道とあらゆる見せかけもの<sup>シヤインウエーゼン</sup>とに對する蔑視、あらゆる弱々しきもの、不明瞭なるもの、歪めるもの、誇張されたるもの及び大言壯語に對する、あらゆる莊重なる又術學的なる態度に對する嫌厭、——これ正に彼自らの感<sup>エムピレン</sup>じ、思考及び文章に於ける又彼の他人に對する態度に於ける明晰と單純との依つて來るところである。苦難に際してのその崇高なる靜平な諦め<sup>ゲラツゼンハイト</sup>の態度、戰における快活なる沈著と勝利の確信、學問上の問題をば易々と取扱ふ手腕、彼自らかくも豊富に持つてゐたもの、即ち博學に對する賢明な輕視、特に彼の晩年の著作に於てかくも照り輝いて居り又我等の心を惹きつけ且つ引上げるところの、正義の念や、親切と仁愛の情や、神への歸依 (Gottergebenheit) と神への不動の信賴 (Gottvertrauen) やである。——レッシングには批難しようと思へば批難し得られる、而もまた實際人の批難を受けたや

うな點もあるが、それですら私には好ましい。若しそれが彼以外の人に見出されたのであつたならば、或は耐久心の缺乏とか、或は移り氣とか、或は不熱心とか、或は恐らく懈怠とも呼ばれさうな點や、確信の缺乏と説明されさうな點が彼には幾多あるのである。彼が多くの作物に着手して而もそれらを未完成の儘に棄て置いたこと及びその文學上の企圖を成就しなかつたことの中に、レッシングが自分の能力——自分の知識と能力——を過重したといふこと及び己が薄弱を意識した結果、その製作を中止するに至つたといふことの徴證を看取することも恐らくは出来るであらう。——かくの如き説明はしかしレッシングの場合には少しも役立たない、彼は實に『懈怠』(träge)なるもの、正反對であつた、自ら完成するの能力なきが如き勞作をば決して企圖したことのない彼に對して、自己吟味と自己認識との不充分なることを批難してはならない、自己の信念に對する忠信、大膽及び性格の確乎不拔なることは、思ふに、彼がその『諸解嘲』〔例へばホラー・テイウス〕と諸論争文において充分明白に

證示したところである、實生活に於ては彼は疎懶でもあり又輕卒でもあつたであらう。——が、しかしそれも亦、彼一個に關する事柄に於てのみであらう、——文人及び學者としては彼は寧ろ非常に氣むづかしく嚴密であり又その批評や書翰中の私的判斷やに於ても彼は不精密と倉卒と——彼が曾てその弟に書き贈つた語を藉りて言へば Rus-Jolei 〔はんざい又〕——をば常に最も鋭く批難した。レッシングの有する諸々の『過誤』と獨自性とは、私から見れば、彼の本質の光輝ある側より來れる過誤と獨自性とである。私はこの匹儔なき偉人をば幾分『放浪的』〔vagantenhaf〕 一處に定住することを好まる意』『遠心的』〔zentrifugal〕とより外には想像することが出來ない。所謂『方正なるもの』、凡庸人的に固定せるものは全然彼の性分に矛盾した。彼は黨人であることは出來なかつた、ある一つの『流派』〔Schule〕に屬することも出來なかつた、がまた自ら流派を起さうとも欲しなかつたのである。彼は哲學上に於ても、宗教上においても、將た又政治上に於ても全く自由であつた。『愛國心』と呼ぶるものは、彼には縁なき

ものである。彼はまた總ての宗派根性を嫌忌した。彼は基督者、——恐らく彼と同時代のあらゆる學者と詩人との中で最も眞摯にして最も純正なる基督者であつた。尤も基督の宗教の信者ではあつたが、基督教のそれではなかつた。彼は兩者を區別した、さうして亦此區別の他にも認められんことを欲した。彼の宗教は未來に屬するものである。即ち、一つの群と一人の牧者とより成る宗教、あらゆる人種と、あらゆる國籍と及び宗旨に屬する一切の人を、基督者ならざる者をも亦眼中に於ける、基督の教へたる眞誠の基督教であり、『ヨハネの遺言』(Das Testament Johannis)である。——レッシングの最後の詞の一つはその『人類の教育』(Erziehung des Menschengeschlechts) 中にある永遠の詞、即ち『余は何も急ぐ必要は無しではなしか。全永遠は余のものではないか』である。——この確信の上にまた何時かは『ヨハネの遺言』が『總てのわが基督教會に於て最もよく見える、最も眼につき易き場所に金文字を以て書きつけられる』であらうとの信仰の上に、レッシングの哲學的並に宗教的世界

觀の全體は懸つて居る。この彼の世界觀からと、またレッシングの本質の最深處は彼の作『ナータン』中の五人物の——即ちナータンと、アルハーフと、サラディンと靈廟騎士と及び修道僧との——綜合であるといふこととからして、私の非常に愛好するこの偉人の、人間及び文人としての、詩人及び思想家としての驚嘆すべき姿の全豹は恐らく説明されるであらう。

(一) これは僅々五、六頁より成れる對話篇で、レッシングは其中に彼の基督教觀の核心をば極めて單純・簡勁に述べてゐる。

レッシングの如くであり且つレッシングの如くに考へる人、さういふ人からは、哲學體系を築き上げるとか、長たらしき論文を草するとか、民衆の前に演説を試みるとか、人を煽動するとか、其時限りのものたる政治や又世人の意見を多く顧慮するとか、名譽の表彰を渴望するとか、教授の椅子若しくは其他の官職を得んと努力するとか、總じて判に捺したやうな形式——現代に於ける最大多數の人及び學者の生涯

は是等の形式の下に過ぎされるのであるが——に自らを適合せしめ得るとかいふやうなことを期待する者は蓋し無いであらう！

レッシングの名を聴くとき、私の先づ第一に想到せざるを得ないのは、『ラオコーン』でもなく、『ハンブルグ劇評』でもなく、或はその文學書簡(Literaturbriefe)や『ミンナ・フォン・バルンヘルム』でもない。これらの著作が、今なほ我等に對して有するのみならず、更に今後多くの世代に對しても依然として有するであらう所の意義は極めて大きいけれども、しかし何時か一度はそれ等が單に歴史的興味からと及び批評や、文辭や、機智や又形式の模範としてのみ讀まれるやうになる時代はやはり来る。——私の第一に想到するのは『賢者ナータン』及びこの作と觀念上の關係を有するところの諸作、即ち神學上の論争文、共救團員の對話、『ヨハネの遺言』及び

「人類、教育」である。

レッシングは(一七七九年五月十八日フリードリッヒ・ハインリッヒ・ヤコービに宛てた手紙の中に)自作『ナータン』をば、「僕が漸く老境に入らんとする時に、あの(ゲッテとの)論争に促されて生まれたところの息子」だと言つて居る。この驚歎すべき作の創造者としてのレッシングは詩人たる以上である。彼は最も遠き未來を洞觀する人即ち豫言者である、又かくの如き者としては今も尙——百五十年前と同じく——最も近代的なる思想家且つ文人である。彼がその解決に力を盡したところの諸問題は正に本當の意味において『近代的』である、それは何人にとつても先づ第一に關心すべき事であり、いつまでも時代後れとならぬものだからである。それは即ち、凡そ一切の人生問題をば除外例なく包含し且つ何時になるも決して人の心を動かさなくなるやうなことのあり得ざる宗教上並に文化上の諸問題である。——レッシングは是等の問題の二三を自ら解決し、其他のものの解決を豫言した。彼の豫言の實現さ

れることは私の疑はざる所である、蓋しそれは畢竟かの黙示録(二二、三。三三―二一)に於て我等に與へられたる、何時かは來るべき完全永遠なる世界秩序―私の未だ曾て疑つたことのない世界―の約束に外ならないからである。―して見ればレッシングがその信仰とその希望とを極めて明白に言明してゐる限りに於ては、我等はバルテルスと共に、最早『レッシング問題』なるものは存しないと云ふことが出来る。蓋し總てが答へられてゐる處、其處では勿論もはや毫も問ふべきものは無いからである。然しながらそれは亦あらゆる人にとつても答へられてゐると言へるか。果してあらゆる人がレッシングの答を聞き取り、さうしてそれを理解したか。若し然りと答へるならば、問はう。總ての人は果してそれをば心肝に銘して己が生活をば基督の基督教の法則に従つて形成したか、と。若し又否と言ふならば、問はう―彼等を妨害して、それを實行せしめなかつたものは何か、と。『新しき永遠の福音』の時代がまだ來ないのであるならば、それは一體何時來るのであるか。思ふに『それは來

る筈である、それは屹度來る筈であるが、完成の時代は』。それに疑を挟むは『冒瀆』と言ふべきであらう。『大慈悲者よ、願はくは私をしてかかる冒瀆を考へしめ給ふな!』何故かといふに、それは神を神とも思はぬことになるからである。また我等は『二種の多を除外せぬところの超越的單一性』を有する神の本質をば如何に考ふべきか。更に又原罪や、基督の贖罪や、不死の教義は如何?……これらはすべて『人類の教育』の中に在るところの問題である、さうして恐らく正當の理由を以て『レッシング問題』と呼ばれ得る、しかも彼の携はつた總ての考古學的、美學的並に戯曲論的諸問題を合計したもののよりも遙に重要なるものである。されば我等は、レッシングに於てなほ問題となるべきものが多い以上、まだ―まだ却々―哲學者並に神學者としてのレッシングを超越してはゐない!我等のさうあることが、もし神の御旨であつたならば我等は如何に幸福なことであらう!蓋しその意味は、すべてそれ等の問題は解決されたといふことであらう。然らばそれはまた二十世紀のあらゆる

人種と、國民と及び宗教とに屬する「文明人」たる我等が現に再び全然墮してしまつてゐるところの野蠻状態をば我等は超脱してゐるといふことにならう。——バルテルスは言ふ（獨逸文學史第一卷、三一五）、戯曲家としての——特にミンナ・フォン・バルンヘルム』の作者としての——レッシングは、獨逸民族がその戯曲上の典<sup>レニエタイプ</sup>型を見出すまで、獨逸のシェイクスピアが現れる迄は生き延びるであらう、と。これは私も亦信ずる所である。否、私は更に一步を進めて、彼はもつと長く生きさうして『獨逸のシェイクスピア』よりも長く生きながらへるであらうと期待する。が、しかし『ナータン』と、かの哲學的並に神學的著作を我等に與へたところのレッシングに至つては、果して何時まで生きるであらう？……私は思ふ、人類がそのあるべき状態に、即ち基督の基督教とその宣傳者たるレッシングが人類の到達せんことを欲した状態に達する丁度それまで彼は生きる、と。然るにこの完成状態に達する迄には前途なほ遠遠である、さうしてそれ迄には新しいシェイクスピアは幾千となく現れ

てはまた消え去るであらう！——新しいシェイクスピアの出現といふ事には總じて大した意義は無い、が、之に反して（神の）攝理が人類をば其處に達すべきものと定め且つ其處に達せしむべく教育するところの完全境に人類が遂に到達するとせざるとには一切が懸つて居る。——バルテルスは（同書三二四頁）、「我等にして若し」ミンナ・フォン・バルンヘルム』と同價値の喜劇を半ダースだけ代償として受取り得るならば、余は喜んで（！）「賢者ナータン」を抛棄するであらうと言つてゐる。が、私は、之に反して、更に一篇の『ナータン』と且つ『エルンストとファルク』の如き一對話篇とを得るためには、甘んじて『ミンナ』の如き作物を幾ダースでも抛棄するであらう。

\*

\*

\*

\*

結婚した時にはレッシングは既に四十七歳（一七七六年）であつた、——彼が結婚

したのはエーヴァといふ婦人で、彼の友なる商業家ケーニヒの未亡人であつた、そしてハンブルヒに於けるその友人の家庭には彼は能く出入してゐた。運命は彼の家庭的幸福の長く續くことを許さなかつた。一七七七年の十二月末に彼に一人の男の子が生れた、けれどもその子は數時間の後に死んだ。其後數日にして母親も亦世を去つた。一七七八年一月三日レッシングはその友エッシュェンブルヒに宛てて次のやうに書いて居る。「僕は妻が全く正氣を喪つて臥してゐるこの瞬間を捉へて、貴君に對し親切なる御同情を感謝しようと思ふ。僕の喜はほんの束の間であつた。さうしてあれを亡くするのは随分つらかつた、あの悴を！ 何故ならあの子はあるに聰明であつた！ あんなに聰明で！ — 貴君は、僕が父親であつたあの僅の時間に、もうそんな親馬鹿になつてしまつたなどと思つてはいけない！ 僕は僕の言ふところの意味を知つて居るのだ。 — あの子は鐵の釘子で此世に引き出されなければならなかつたが、これは蓋しその聰明を證する所以ではないか。また生れ落ちると直ぐ

（この世はどうも變だと）不審を起したのは？ あれが再びこの世を遁れるべく第一の機會を捉へたのは聰明と謂ふべきではないか。が、又あの小坊頭は屹度母親をも一緒に引き摺つて行くに相違ない！ 實際、彼女の助かつてくれるといふ希望は尙極めて少いのだ。 — 僕もいつか一度は他の人達のやうに幸福になりたいと願つたのであつた。けれども僕はどうも廻り合せが悪かつた。』ハイネも評してゐる如く、「機智の裡に陰慘の氣を帯べる」(grüßlich witzig)この文句は、私の知れる苦痛の表出中で最も強く心を動かすものに屬する。 — それから一週間後にレッシングは夫人の死を簡單にかう報じてゐる。「僕の妻は死んだ。で、僕は今や亦この經驗までしてしまつた。僕には、しようと思つても、もうこの種の經驗は多く残つてゐる筈がないのが嬉しい、これで僕も全く氣が軽くなつた。』 — 彼はその悲哀を忘れんが爲に一つの手段を索めた。今後は「文學上並に神學上の(勞作に依つて得られる)鬱散といふ催眠劑の可成りの貯」が彼を助けて、その(生の)路をただ一人で半睡半

醒 (dusein) の裡に續けるやうに、「一日一日をばまあ何うにか斯うにか」堪へて行くやうにしてくれねばならぬ、と彼は言つて居る。その精神的催眠劑とは正にかの所謂『ウォルフエンビュッテル斷篇』(Wolfenbüttler Fragmente)と、それに關聯せる論争文と、『ヨハネの遺言』と、『賢者ナータン』と、『ヘルンストとファルク』(Ernst und Falk)共救團員の對話)と及びレッシングの絶筆たる『人類の教育』である。一七八一年二月十五日にレッシングは死んだ。

晩年のレッシングについて尙暫く語ることを許して戴きたい。私は、それが讀者諸君に退屈を感ぜしめる様なことはなからうと、又——これは私の特に切望する所であらうが——恐らくは亦諸君を促して、レッシング其人の著作を読み且つ彼に關する二三の良書を——就中『獨逸文學の革新者としてのレッシング』と題するクーノー・ライッシャーの二小卷、ダーヴィッド・シュトラウスの『レッシングの賢者ナータン』、其著『體驗と作詩』(W. Dilthey, Das Erlebnis und die Dichtung) 中に收められたるレ

レッシングに關するディルタイの論文、ギデオン・シュビッカーの『レッシングの世界觀』[G. Spicker, Lessings Weltanschauung]及びバルナーの『レッシング』(Nr. 52 der Sammlung „Wissenschaft und Bildung“ 1908)等を繙讀するに至らんことを希望する者である。

\*

\*

\*

\*

口頭若しくは文書による傳トプグライシオン統及び神の啓示の上に基礎を有するところの、従つて、人間が自己の純粹なる、外的影響に對して獨立せる理性によつて見出したのではなく、寧ろ外部から、一つの權オインツグライ威から受取りたる眞理の上に立つところの宗教は既ボグライゲ成若しくは啓示宗教と呼ばれる。例へば舊約聖書や、教會的基督教や又は回教の宗教の如きは即ちこれである。その反對は通例自然ナチュリヒ的もしくはは理性宗教(natürliche od. Vernunftreligion)或は亦理神教(Deismus)とも名づけられてゐる。—



が、何れも悪しき誤解され易き名辭である。信仰と理性との間に存する表面上の反對を和解せしめることは不可能でないのみならず、寧ろ理性なる審判者の前に信仰簡條を辯護すべき總ての護教論の固有自明の任務である。——しかも此事は、第十七八世紀の所謂『啓蒙』時代の人々には、我等にとつての如く、しかく明白ではなかつた。彼等にとつては『理性宗教』は唯一の眞誠にして淨化されたる、苟も思想家たる者にふさはしき宗教と思はれた。——第十八世紀における理性宗教の最も博學且つ犀利なる代表者の一人は、ハンブルヒの大學程度のギムナジウムに於て希伯來語教授たりしヘルマン・サムエル・ライマールス（一七六八年歿）であつた。彼は特にその攻撃の鋒をば彼の信じ難しと做したところの聖書の記録に向け、また啓示や奇蹟に關する教會の教義に向けた。彼は即ち、神の智慧及び正義は、法則に據つて秩序立てられたる完全な萬有のうちに顯現する、しかもこの萬有たるものはや何等の『奇蹟』も、詳言すれば超自然的なる且つ神の智慧に矛盾する如き、言はゞ之を後より

改善する如き干涉も神の側から來ることを必要としないものである、と説いて居る。

この理性宗教に屬する主要なる文書は『神の合理的尊崇者の爲の辯護』(Apologie oder Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes)と題するライマールスの大著である、さうして之は彼がその死ぬる一年前に完成した、しかも賢明なる用意から秘してゐた所のものである。それを知つてゐたのは獨り彼の家族の者と極めて親近なる友人等のみであつた。千七百六十六年にハンブルヒに移りさうしてライマールスの子女達と、特に娘のエリーゼと懇意になつたレッシングも亦、彼女を通じて親しくこの著作を識つたのであつた。千七百七十四年から七十八年に互つて彼は其中から、著者の名前を出さずして、一聯の斷篇を公にした、さうして恰もそれをウルフエンビッテルの公爵家圖書館——千七百七十年に彼がその館長となりさうして死に至るまで在職したところの圖書館——所藏の手記文書の中に發見したものである

かの如くに装つた。—この七つの断篇が正にかの所謂「ウエルフェンビュテル断篇」である、さうして是等の篇は、例へば嘗てスピノーザの「神學及び政治學に關する論文」や、また更に數十年後に、ダーヴィッド・シュトラウスの「耶蘇傳」杯の各その當時に於けると同じく、正統派學者の間に驚愕を起さしめたものである。第一と最後のもの以外の断篇には、レッシングは總て反駁を、即ち評言を附して出版した。是等の評言を見れば、彼が必しも總ての點に於て著者の所見に同ずる者でないことが分かる。彼は論題に對した公明にして客觀的なる、純學者的検討を試みんとしたに過ぎずして、基督教を攻撃しようとしたのではない。宗教問題に對するレッシングのこの客觀的態度は彼の反對者らの理解せざる所であつた。彼等は彼を以て基督教の敵と做しさうしてレッシング自身の見解と断篇作者のそれらとの間に存する差違を顧慮しなかつたのである。—

忌諱に觸れることの最も多かつたのは最後の三篇であつた。第五篇の目的は「舊

約聖書の諸篇は、一つの宗教を啓示する爲に書かれたものではないことを」證明するに在る、ところがこれは靈魂不死や又來世における報償と所罰の教説の缺如せる一事に徴するも既に明白であると言ふのである。第六篇は耶蘇復活の物語に關するものである。それは即ち、祭司長が番兵を置いて（耶蘇の）墓を固めしめさうして兵卒共に銀を與へて、その弟子等來りて耶蘇の死骸を盗み去れりと言ひ觸らしたといふ福音書（マタイ傳二七、六二—二八）の物語を考察してゐる。ライマールスはこの記事を以て信じ難しと做し、四福音書間における相互の差違や矛盾を指摘し、さうして、弟子等は實際基督の死骸を盗んだのである、又かの物語は「嫌疑がその反對者の側へ懸かるやうにする爲に、作爲されたに過ぎぬ」との結論に達してゐる。一年後にレッシングは別の書として最後の篇（「耶蘇及び其弟子の目的に就いて」）を出版した、尤も彼はそれには序文を附したのみで、「駁論」を添へることをしなかつた。ライマールスは其中に自説を述べて、一體正統派基督論の根本教義は耶蘇から出た

ものではなく、寧ろ彼の死後その弟子等によつて案出されたのである、——耶蘇の死によつて、従つて亦猶太人の地上的救主たるメシヤは近づけりとのその希望の水泡に歸したることによつて陥れられたる困惑から基督信徒を救出し、彼等を安心させる『必要に迫られて、數日後に』案出されたものであると言明して居る。——教義をかく解釋することは勢ひ耶蘇の弟子を虚言者となし、又自らメシヤと信じたる耶蘇をば自ら欺きたる狂熱家と做すものである。

既に述べた如く、レッシングは必しも無條件に斷篇作者の總ての所見に同意してゐる譯ではない。彼は黨派を超越してゐた。彼は正統派信者でもなければ又自由思想家でもなかつた。が、しかし理論的には彼は寧ろ正統派の方に傾いてゐた。彼は、(彼には『無器用者や半可通の哲學者等の補綴細工』と思はれたところの自由思想家等の教説よりも、寧ろ正統派の教説が、一層嚴密に首尾一貫して居り且つ形式上の統一を保つてゐることを認めたのである。

是等の斷篇に反對して立つた中で代表的とも目すべきはハノーヴァーのヨハン・ダニエル・シューマンと、及びウォルフエンビュッテルの主席牧師ヨハン・ハインリッヒ・レスとの二人であつた。前者は『基督教の眞理に對する諸論證の明白性に就いて』と題する一文を以て、後者は匿名の一論文、即ち耶蘇の復活に關する記事において四福音書が毫も相矛盾せざることを立證せんと試みたる論文を以て。

第一の攻撃に對しレッシングは『<sup>ガイスト</sup>靈と力との證明にづいて』(一七七七年)と題する小論文を以て答へてゐる。謂ふところの靈の證明とは即ち舊約聖書中の實現されたる基督に關する豫言で、力の證明とは基督の行ひたる奇蹟である。この兩者については歴史が我等に報道して居る、さうして正統派の信仰は是等の報道の上にその基礎を置いてゐるのである！しかし、とレッシングは反駁して言ふ、その實現されたといふ事が余にただ他人から、歴史的に傳へられてゐる所の豫言や、他人が見たといふことを余がただ歴史的にのみ知つてゐる如き奇蹟は、余が自ら體驗しました

自身の眼を以て見るところの豫言や奇蹟とは矢張り同日に論ずることは出来まい。後者は直接に働くところの事實即ち靈と力とによる現實的證明である。之に反して前者は『(傳統なる)一つの媒介を通じて働かなければならぬ。然るにこれはそれ等から總ての力を奪ひ』それ等をば『靈と力とに關する人間的證言』に墮せしむるものである。従つてまたたゞ豫言と奇蹟とに關するこれ等の報道のみから取られたる基督教の眞理に對する證明は、二千年の歳月を隔つる余にとつては、もはや何等の力をも持ち得ない。—レッシングは必しも聖書の物語のてゐる豫言をも將た又奇蹟をも否認してゐる譯ではない。彼は、唯だ報道である限り、それ等は決して基督教に於ける自餘の眞理に對する證據と認められることは出来ず又認められてはならないものだといふ事を説いたに過ぎぬ。基督の教を信すべく我等を餘儀なくするところの根據は是等とは全然異なるものである。然らばその根據とは？ —『それは即ちかの奇蹟と實現されたる豫言の果實たる是等の教其者に外ならない、余は是等の

果實(詳言すれば人類に對する基督教の影響)が熟するのを又熟したのを眼前に見る』さうしてそれを以て満足する。『(その果實の起源に關する)傳説が間違つて居らうと將た又眞實であらうと、そんな事は余にとつては何うでも好い。兎に角その果實は優秀である』—

レッシングは彼の論文をば次の如き詞を以て結んでゐる。『終に臨んで余は一つの事を希望する。ヨハネ傳福音書によりて互に引離されたる總ての人が、願くはヨハネの遺言によつて再び一つに結びつけられんことを！ この遺言は勿論正典に屬するものではない、けれども決してそれが爲にその神々しさが減ずる譯ではない。』さうしてそれは亦短い。それは即ち高齢に達せるヨハネが、長い話をするにはもう餘り老衰してゐた頃に、その弟子たちに向つて日毎に繰り返したところの『子等よ、互に相愛せよ！』なる數語(獨逸語では Kinderchen, liebt euch! の三語)から成つてゐる。—人から遂に『しかし、先生、あなたは一體なぜ何時も同じ事を仰せられ

るのですか』と問はれたとき、彼は答へて『それは、主の命じ給うた所だからである。もし實現されるならば、唯そのみで、唯そのみで充分だから、否十二分だからである』と言つたといふ。——この物語——或は逸話と云つても好いが——は『ヨハネの遺言』(Das Testament Johannis)と題するレッシングの第二神學論争文の中に在り、『彼』と『余』との間の短い對話から成つてゐる、さうしてその『余』とは即ちレッシングである。

『余』は次の如く物語つてゐる。聖アウグスティヌスの傳へる所によると、一人のプラトン學徒は、ヨハネ傳福音書の冒頭(『太初に詞ありき』云々)こそは、これ實に『あらゆる教會に於て最も能く見える、最も眼につき易き場所に金文字を以て書きつけられるだけの價值あるものである』と言つたといふことである。——『彼』はそのプラトン學徒の言を正當と做し、『プラトン其人といへども』この冒頭『以上に崇高なるものを書くことは能くしなかつたであらう』と言つて居る。——『恐らくさうかも

知れない』と『余』は答へてゐる。——『それにも拘らず私は、哲學者の手に成る崇高なる著作などを餘り重視しない私は——これは極めて好くレッシングの特徴を示す詞である!——信ずる、我々の教會に於けるかの榮譽ある位置は寧ろ且つ遙に正當なる理由を以て『ヨハネの遺言』に與へらるべきである、と。——ただ數語より成れるこの子供らしき訓誡は實に基督の全教訓と、賢者ナータンの全智慧を含んで居る。それは即ち基督教的愛は基督教的信仰が無くともなほ可能である、基督者と呼ばれなくとも、人はなほ基督者であり得る、是等の數語に慚へる生を營む者は、何れの宗教に屬するも基督者である、との教である。——

その第二の神學上の反對者レッスに對してレッシングは、『再答辯』(Duplik)と題する一文を以て答へてゐる——これは匹儔なき文辭を以てせる論争並に批評上の見事

なる作である。

その主題となつてゐるのは耶蘇の復活である。ライマールスは、福音記者等のそれに關する報道が互に相矛盾してゐるといふ其理由からも亦復活は信ずることが出來ぬと主張してゐる。——レッシングはそれに對し、縱令それに關する報道は互に矛盾してゐるとはいへ、なほ復活は信ずることが出來ると云つて反駁して居る。さればこの反駁はレッシングが依つて以て斷篇作者の消極的結論を斥けた所の答辯 (Boplik) である。然るにレッスはこれに注意せずして斷篇を駁する彼の文に於てレッシングと斷篇作者とを區別しなかつた、従つて後者を攻撃した彼は同時に亦レッシングをも攻撃することとなつた。(この第二の攻撃に對する答辯をレッシングは『再答辯』(Duplik)と呼んだのである。)

レッスは斷篇作者の論證を嘲笑して、陳腐な、もう疾づくに論破されたる空語と做し、さうして、福音記者等の報道は相矛盾するものに非ざるが故に、基督の復活は

絶對的に信じなければならぬものだ、と言明して居る。——此處でレッシングが辯護してゐるのは學者としてのライマールスであつて、彼の説ではない。レッシングは言ふ。ライマールスは眞實ならざるものを眞實と做し、さうしてそれをば確信を以て犀利に且つ謙遜な態度を以て貫徹しようと努めたのである。かくの如き人は、「最上、最高貴なる眞理をば偏見から、その反對者を誹謗することにより平凡なる仕方を以て辯護する人よりも限りなく貴い。」それから數行後にはかの屢々攻撃される有名な句が出て居る。「人間の價値を成すものは、その所有する、もしくは所有すると誤信する所の眞理ではなく、寧ろ眞理に到達せんとして費したる誠實な勤勞である。蓋しその能力の擴大するのは、眞理の所有によるよりも、寧ろその探究に依るのであり、また彼の絶えず完成の域に近づき得るも獨りこの結果だからである。所有は人をして安逸ならしめ、懶惰ならしめ、高慢ならしめる。——今假りに神が右手には一切の眞理を、左手にはたゞ一つの常に活潑なる眞理追求の衝動を握つて

(尤も絶えざる且つ永遠の迷を伴ふものではあるが、との附言を以て)「選び取れ」と言つたとする。然らば余は謙遜に彼の左手に縋つて、さうして言ふであらう。「父よ、

(此方を)與へ給へ! 純粹なる真理は實に獨り汝にのみ屬する!」と。』

この説に對しては異議を唱へる者が少くない。彼等は即ち言ふ、真理の所有を斷念するは不自然であり、理性に矛盾する、と。例へばヒルティの如きも之に屬する。しかし何うしてさうなのか。それは寧ろ最古の智慧であると同時にまた全然基督教的精神を以て語られたものではないか。プラトンも真理は獨り神にのみ屬すると言つて居るではないか。又、此世に於ける我等の認識を以て朧なる鏡の上の像に比し且つ不完全のものと呼んだ使徒パウロの(コリント前書第十三章中)の詞も、十全の真理は我等の到達し得ざるところだといふ同じ思想を述べたものである。また我等死すべき人間は總じて十全の真理に堪へ得るであらうか。これ實にかの——未だ曾て死すべき者によつてその被覆の上げられたことのないといふ——『サイヌの覆は

れたる像』〔シムラーの同〕の物語の意味である、即ちその被覆を上げれば、彼は多分眞理を觀得んも、それを觀ることはやがて彼に死を齎す所以である。——世界文學中の最大の作物たるゲーテのファウストの根本思想も、また眞理追求の努力(Streben)の中に人はその解脱を見出すといふ事である。天使等は(第二部の終に於て)歌ふ。

„Gerettet ist das edle Glied

Der Geisterwelt vom Bösen:

Wer immer strebend sich bemüht,

Den können wir erlösen.“

『惡の手より、

靈の世界の尊き一人救はれたり。

絶えず努め勵むものは、

われ等これを解脱せしむることを得ん。』

安逸、懈怠にして高慢なるは正にバリサイ人である、蓋し彼等は自ら眞理の所有

者を以て任じてゐるが故である。而もこの高慢、この自任こそはこれ實に就中イエスを以て不興と憤怒とを催さしめた所のものである。

レッシングのこの詞を批難してゐるのが丁度ヒルティであるといふ事は、奇異に感ぜられる。彼の言ふ所（それも一度ならず）も畢竟同じ事なのであるから。例へば『幸福』第一卷（一九一〇年）一九九頁には次の如き詞がある——『道德的世界秩序を教義化することは不可能である。既に古代人の見解によるも人間は神を見得るものではないのである、さうして基督教も亦この種の詳細に渉る闡明をば總て斷々乎として斥けて居る。』また同じ頁（脚註二）に於て彼は神に關する學即ち智識、從つて真理の認識の不可能なるの故を以て、神學の可能を否認してゐる。——聖書に據れば神の本質は天使にすらも永久に隠されたるものである。十全な、純粹な真理の所有に向つて努力するは、これ實に不可能なるものに向つて努力することである。神に求むるにその右手を開かんことを以てするは、これやがて人間を變じて第二の

神と爲さんことを求むるに等しい、何となれば如何なる被造者も真理を観ることは來ないからである。

さればレッシングにとつては、福音記者等相互間の矛盾は、必しも傳へられたる事柄の眞實なることを認める上の妨とはならぬ。これは世俗的（聖書關係以外の）史家等が或る同一の事件について語るとき、彼等の諸報告間に存する矛盾が必しも彼（レッシング）の、その事件其者を信ずることを妨げぬのと毫も異なる所はない。我等は一方に於てはリヴィウスとかタキトゥスとかの如き史家をば『極めて公明にして且つ高雅なる態度を以て取扱ひ、その一言半句に至るまで一々之を捉へて嚴しく穿鑿するやうな事をしないのに、何故マタイやマルコや又ルカやヨハネに對しても亦同じ態度に出ないのであるか。』——史述上の矛盾は出所（根本史料）に關する不完全なる智識（如何なる史家をも——如何なる」と言ふ所以は、如何なる史家も決して一切の史料をば手許に持つてゐる筈がないからである——多かれ少かれ虚言者た



らしむるに相違ないところの不完全なる智識に基因すると説明せねばならぬとは、これ世俗歴史に於て言はるる所である。然るに福音書は正に靈感によれる、聖靈から感得されたる文書である。さらば我等は如何なる意味に於て、福音書中の矛盾について語るべきか、又は語ることを許されるか。これは總て、『神的靈感』(Theopneusie)の概念を如何に解するかに懸る。それを誤つて、即ち聖書中の一言半句をもすべて靈感されたものと做すところの似而非正統派信者(Orthodoxist)の爲すが如くに、狹隘に解するならば、然らば勿論福音書の間には何等の矛盾もないか、若しくはただ外観上の矛盾が在るのみである、が、しかし眞誠の正統派信者(Orthodoxe)の爲すが如くに、<sup>インスピレーション</sup>靈感なる語をばたゞ或一つの事件を報道せんとする一般的動機(Antrieb, Anregung)と解するに止めるならば、然らばかの諸矛盾は總て咎むべきものではなくなり、さうして世俗的史家の場合に於けると同様の單純なる仕方を以て説明し去られるのである。

正しく、自由に且つ合理的に解せられたる靈感の概念は、是等の(福音書相互間の)矛盾にも拘らず、基督の復活に對して疑念を、従つてまた復活を基礎とせる基督教の眞理に對して疑念を抱くが如きことなきやうに我等を護つてくれるのである。が然しレッシングは更に一步を進めて主張して居る。今の世に生ける我等は、この信仰に關しては、『なほ見證<sup>アウゲンツラウイゼン</sup>人の生きてゐた時代の人々よりも一層好都合の位置に在る』と。何故かといふに、見證人等の眼前に在つたのは、獨り(建築の)基礎のみ、(詳しく言へば單に復活の事實のみ)であつたが——彼等はその安固を確信してこの基礎の上に一つの宏大なる建物(即ち基督教といふ全建築)を建設することを敢てしたのである——我等は之に反して眼前にこの建築其物を見てゐるからである。『單にわが家の基礎の確否を確めんと的好奇心からわが家の基礎を掘探る如き愚人が何處にあらう? : : 家がかく長年月に互つて依然として動かざるが故に、余は今やその基礎の良好なることをば、その置かれるのを親しく目撃した人々の知り得

たよりも更に確實に知つて居る。』——余の讚美するは、地上に立てるものであつて、地下に隠れてゐるものではない！愛する建築師（神のこと）よ、この建物が耐へる、しかもかく永く耐へる事實から推して、それが良好にして確乎たらざるべからざることを結論し得る以上には、余がそれについて何等知らんと欲せざることを許し給へ……全體の美を、これを、これを觀照して余は悦び楽しみたい、これの裡に、これの裡に余は汝を讚美しようと思ふ、愛する建築師よ！また縦令この莊麗なる全建築に何等の基礎も無いとか、又はそれがただ單なる石鹼泡の上に立つてゐるとか、いふやうな事が可能であるとするも、なほ余は讚美するであらう。』——更に數行後にレッシングは耶蘇並にその弟子たちの奇蹟について次の如く語つてゐる。奇蹟が、その有つべき筈であつた所の確信せしむる力を有つてゐたといふ事だけで既に充分である！『しかもそれ等の奇蹟にかゝる力の籠つてゐたといふことは、今なほ絶えず繼續せるこの宗教そのものの奇蹟の證明する所である。』

\* \* \*

ハンブルヒ在住の牧師メルヒオール・ゲツェとの論争の序幕として、その前驅をなせるものは一つの『譬喩』(Parabel)である、さうして之についてはレッシング自ら言つてゐる。『あれは余の書いた中で最悪なものではない。かの一篇に於て余の期したところは、その裡に基督教の全歴史を叙述するに在つた』と。——『深く考へ抜かれたる、何れの部分に於ても適切なる且つ遊戯の如く易々と物語られたる寓話<sup>フアベレ</sup>の衣の裡に、我等は、レッシングの宗教上並に神學上の根本觀を含める筋書<sup>プログラム</sup>を、語を換へて言へば、論争問題の核心と及びその解決の核心とを認めることが出来る』とクロー・フィッシャーは評して居る。

レッシングは親しくゲツェと相識り且つ彼をば博學な人及び快き話相手として尊重してゐた。またゲツェの方ではレッシングの考古學的研究に興味を持つた。この親

睦はしかし長續きがしなかつた、さうして『斷篇』の出版されると共に、兩者の關係は全然冷却してしまつた。一七七八年三月にレッシングはその『譬喩』を公にしたが、それはまだ論争文ではなかつた。それに次いで出た『願』(Die Bitte)と題する一文に於てレッシングは、願はくはゲッツェが自己の誤謬を覺りさうして、その爲せし如く、『斷篇』の公表者をばその著者と混同するやうなことを止めて貰ひたいとの希望を述べた。然るにゲッツェはこの願を聽き入れようとしなかつた故に、レッシングは彼に『絶交狀』を送つた、さうしてそれは次の如き詞を以て結ばれて居る。「ゲッツェ牧師よ、貴下は、筆紙の續く限り、自分でも書き、また他(味方の人々)にも書かしめられよ。余も亦書くから。余若しくはかの匿名者に係る極めて些細な事に關しても、貴下の言ふところが正當ならざる場合に、余が若しそれを正當として認めるが如きことあらば、その時は余は既に筆を手にする力が無くなつたのである。」——我等は先づ第一に『譬喩』を考察しよう、それを全部引用することは、此處で私

に指定されてゐる紙面と並に(『神學』はもう澤山だと恐らく思つてゐるかも知れぬ)讀者に對する顧慮との許さざる所である。が、しかし私は今少しの辛抱を願ひたい、さうしたならば私はこのレッシング論を終るつもりである。

ある大國の賢王はその主都に於て、限りなく廣濶にして又極めて異様な建築法によれる宮殿を持つてゐた。王はこの宮殿の中に、彼が統治の協力者及び手足として要した所の總ての人を共住せしめた。これ即ちその建築の絶大ならざるべからざる所以である。しかしその建築法は奇異なものであつた、蓋しそれは建築の規則に反してゐながら、しかも快感を與へたからである。その宮殿は亦久しきに耐へ且つ住心地の好いものであつた、何故ならばそれは逸たる太古以來、建築師等が最後の仕上げを了つた丁度その時通りの完全状態に於て依然立つてゐたからである。又それが不思議且つ不可解の觀を呈したるはただ外部から見た時だけのことであつた、——内部に於ては到る處に光があり又相互の關聯があつた。かゝる宮殿の外觀によつて

特に不満を感じしめられたるは、自ら建築法の通曉者を以て任じたる人達であつた。彼等は、何故にこの建築がかくも僅少の窓を有し且つかくも多数の戸や門を有するかを解せずして斯かる構造の果して合目的なりや否やについて論争した、これ蓋し、各室の光は上方から取つてあつたといふことを彼等が知らなかつた爲である。この論争を最も甚しく紛糾せしめ且つ長引かせたものは、最初に一見した所では寧ろそれを最も容易に解決するに恰好と考へられたところの或物であつた。人々は即ち、恐らく依つて以て宮殿の構造を説明し得るであらうと思はれた所の、最初の建築師等の遺したる様々の古き圖面が在ると信じてゐたのであつた。然るに是等の圖面なるものは、その言シユツラ語も意味も殆ど失はれたるに等しき又今や何人からも各その欲するが儘に解釋さるゝに至つた所の文句や象徴を以て註されてあつた。似而非建築通は何れも古い諸圖面の中から思ひ／＼の新圖面を造り上げた、さうして彼は往々、『獨り自らその本物なることを誓つたのみならず、猶また他人をして同じ事を誓

ふべく或は説得し、或は強要するに至つた程に、それ(新圖面)に魂を奪はれたのである。——たゞ僅少の人達のみは言つた。「一體汝等の圖面は何の我等に關する所があるのか。これであらうと若しくは他のであらうと、それ等は總て我等にとつては同じ事である。最も慈悲深き智慧が全宮殿に充溢してゐること及び其處から全土に擴布するものは、美と秩序と安寧との外何物も無いといふことを刻々に我等が經驗してゐること、そのことで充分である」と。——彼等は屢々不快な目に會つた、この僅少の人達は！何故ならば、彼等にして時々氣輕に笑ひながらの特種の圖面の一つを取つて、少しく之を緻密に検査するが如きことあらば、彼等は、この圖面を本物だと言つて誓つた人々から、宮殿其物に放火したる者として惡口を浴びせられたのである。——けれども彼等はそれを意に介しなかつた、さうして恰も其故に、宮殿の内部に於て働いてゐるところの且つ自分等にとつては毫も論争とは思はれざる論争に自ら加はるの時間をも亦興味をも持たなかつた所の人々の間に伍するに極めて

恰好なる者となつた。』——ある夜突然騒ぎが起つた。番人等は『火事だ！ 御殿が火事だ！』と叫んだ。すると何れも皆臥床から飛び起きさうして恰も火事は我が家ででもあるかの如くに、その所有してゐる中で最も貴重だと信じたるもの——即ち自己の手に成れる圖面を取出し、それを携へて街頭に駆け出しそれから、宮殿を救ひに駆けつける代りに、先づ豫め人々に向つて、察する所どの邊が焼けてゐる又何處が最も消防に好い位置であるかといふことを、己が圖面に照らして指示せんと欲したのである。皆の者は互に言ひ争つてゐた、だから宮殿にして焼けたのであつたならば、それは亦實際その爲に全部焼失したかも知れぬのである。——『然るに實は驚かされた番人は極光を見て火事と思つたのであつた。』——

この『譬喩』の意味は明白である(クローノ・フィッシャー著『獨逸文學の改革者としてのレッシング』第二卷、一二、一三頁参照)。宮殿は即ち宗教である、古い最初の圖面は即ち聖書の記録である、似而非建築通は即ち聖書の字句に拘泥するところの神

學者等である。是等の神學者等は際限もなく互に相論争する、それは彼等の中には一人として根本記録を正しく了解する者無きに拘らず、何れも自ら最も好く了解してゐると信じ且つ自分勝手に解釋を下すからである。然るに一たび批評がかの古き圖面を攻究解明するや否や、聖書學者等は直ちに火事騒ぎを始め、宗教が、基督教的信仰が危険に瀕してゐる、と叫ぶのである。かの『建築通』の一人なる牧師ゲッツェの如きも亦、かの『ウォルフエンビッテル斷篇』が出た時、叫聲を揚げたのである、蓋し彼は是等の斷篇が、實はかの『極光』の宮殿に於ける場合と同様に、宗教に對して何等危険なるものに非ざることを知らずして、却つてそれを王宮に於ける火事と認めたのである。

ゲッツェにして若し信仰を擁護せんと欲したのであるならば——これは牧師としての彼には無論正當なことであり且つ義務であつたが——、彼は宜しく同じ武器を以て斷篇作者と戦ふべき筈であつた、即ち『學生や又腕白小僧の如くに』騒ぎと喧嘩腰

とを以てすることなく、理性及び學力といふ武器を以て戦ふべきであつた。就中、**レッシング**に鋒を向けるべきではなかつた、彼はたゞ斷篇の公表者たるに過ぎず、また牧師ではなく、圖書館員であつたから。牧師と圖書館員と、この兩者の『關係は、恰も羊飼と本草家とのその如くである。』本草家は、その植物學上の智識を豊富にせんが爲に、本草を蒐集する、さうしてその發見した小草が果して有毒なりや否やを顧慮しない。之に反して羊飼はたゞ己が牧場の草について知る所があるのみである、さうして我が家畜の健康に宜しく且つその好む如き種類のみを尊重し、栽培する。『我々も亦同様である、尊敬する人よ』と**レッシング**はその『願』において續けてゐる。『余は澤山の藏書の管理者なのである、それで枯草を護る狗ではありたくない。——余にして若し余に託されたる藏書の中に、未だ世に知られてゐないと信ずるものを見出すならば、余はそれを公に告知する……さうして其際……それが果して或る人には有益であるか又他の人には有害であるかといふことには全然無頓着であ

る。有益と言ひ又有害と稱するも、是等は恰も大と言ひ小といふが如く、相對的觀念に過ぎぬ。——然るに尊敬する人よ、貴下は之に反して、あらゆる文書をば、それ等が貴下の教會員に及ぼすの虞ある影響によつてのみ評價し、さうしてその監視は何れかと言へば、等閑に附し過ぎるよりも寧ろ用心深過ぎんと欲してゐるのである……大變善い事である！余は之がために貴下を賞讃する者である、尊敬する人よ。然しながら余も、貴下が貴下の義務に忠なることを賞讃してゐる以上、貴下に於ても亦、余が余の義務を盡すことを——若しくは（同じ事であるが）盡すと信じて行つてゐる事を批難せられざらんことを望む。』——**ゲッツェ**は書いた。もし、自分がかの斷篇を公表したのであつたならば、自分は臨終の際に戦慄するであらう、——戦慄する所以は、自分は之によつて一種の罪惡を犯した、即ち反基督教の見解の擴布を幫助し且つ敬虔なる人々の心を攪亂せしめたと信じたであらうからである、と。之に對し**レッシング**は答へて言ふ。『余は恐らく余の臨終に際して、戦慄するかも知れない、けれ

ども臨終前には余は決して戦慄せぬであらう。往古のアレクサンドリヤや、ツェザレヤや、コンスタンチノープルやの図書館員等が、もしその爲し得る所であつたならば、ケルズスや、フロント(Cornelius Fronto 一七五年歿?)〔マルクス・アウレトリ〕や、ポルフェリウスやの著書に對して取つたであらうことを現時の聰明なる基督者等が希望してゐる如き手段を余が(かの斷篇に對して)取つたといふこと、其事のために戦慄するが如きことは最も妙す。』

\*

\*

\*

\*

我等の知れるが如く、レッシングはその宗教上の見解に於ては黨派を超越してゐた。彼は正統派信者でもなければ、また自由思想家でもなく、反つて宗教を以て、聖書の字句の末に存せずして、むしろその精神に對する信仰の裡に在りと做すところの一人の基督者であつた。字句に對するアインウニルフェ駁撃はまたその宗教に對する駁撃となる

譯ではない、それ故に、たとひ一步を譲つて斷篇作者の議論が覆すべからざるものであつたとするも、それが爲に宗教が危険に陥るが如き虞はない、と彼は説いて居る。『字句は精神ではなく、また聖書は宗教ではない。従つて字句に對する又聖書に對する駁撃は必ずしも亦その精神に對する又宗教に對する駁撃とはならぬ、』『聖書なるものが在つた前にも宗教は在り』、また『基督教は福音記者や使徒等が著作したよりも前から在つたのである。』『されば是等の文書の有する意義は如何に多大であらうとも、しかも基督教の全眞理がそれ、の上に懸つてゐるといふが如き事は到底あり得ない。』この故に文書によれる傳統はその内的眞理から説明されなければならぬ。しかもこれは許容されてゐるのみならず、寧ろ宗教の利益のために命ぜられてゐるのである。—レッシングは是等の思想をば『譬喩』に續ける二篇、即ち『公理』(Axiomata) — その五つは(自第三至第七)我等の知れるところである — と及び『ゲッツトを駁す』(Anti-Goeze)の二篇に於て詳論して居る。

讀者諸君は、レッシングの人格とその純なる宗教心にとつて殊に特徴ある二三の箇處を上二篇中から逐語的に引用することを許されたい。

第七公理に於て彼は言ふ。『恰もそれに對しては唯だ一つの答しか可能でないかの如くに、確信ある口調を以てゲッツェ牧師が提出された問については余は今なほ怪訝の念に堪へない、牧師の問に曰く、『もし新約聖書の諸篇が書かれずして我等にまで傳はつてゐなかつたとしたならば、基督の行ひ且つ教へた所のものゝ痕跡は果して世界に残つたであらうか』と。——余がこの問に對し明確に否と答へるを敢てする程に小さきものと基督の教を考へることの決して無いやうに、神は余を護り給はんことを！ 否、余は他の口吻を真似てこの否の一語を發するやうなことはしない、たとひ天上から天使がそれを言つて見せようとも！ 況んや一人のルーテル派の牧師がそれを余に言はしめようとするに於ては猶更の事である。——凡そ世界に生起するものは總て、——人間は必ずしも常にそれを證示し得ないとはいへ、そ

の痕跡を世界に止めるであらう、然るに、神々しき『人間の友』(基督のこと)よ、書き記せと言はずして、宣べ傳へよと命じ給ふたところの汝の教のみは、縱令それが獨り口頭を以て宣べ傳へられたとするも、依つて以てその本原の何たるやを認知せしむるに足る如き何等の、全く何等の影響をも果して残さなかつたであらうか。汝の詞は、先づ死せる文字に移され、然る後始めて命の詞となつたと言ふのであるか。書籍なるものは果して人間を照明し且つ改善すべき唯一の途であるのか。口頭傳統は毫も價值無きものなのか。又もし口頭傳統は幾千の故意もしくは無故意の變造(Vorfälschung)を免れないと言ふならば、之はまた書籍に於ても同様ではないか。我等は言ふ、神は記録を護り給ふたと。然らば彼は亦、その直接の威力の同じ發揮によつて、それと等しく、口頭傳統をも變造に對して護り得なかつたであらうか。——嗚呼、全能の神よ、汝の詞の説教家を以て自ら任じ且つ又汝が、かしくも彼に示し給ふた所の道以外には、汝の意圖を成就すべき何等の他の道をも有し給はなかつたとまで主



張する程に大膽なるかの人は禍なる哉！あゝ、彼の看取する此唯一の道以外の總ての道をば、自ら其を見ざるの故を以て、絶對的に否認し去らんとするこの神學者は禍なる哉！——大悲の神よ、願はくは余が決してかくまで僭越にならない爲に、決してかくも深く正統信仰に入ることなからしめ給へ！——

『ゲッツェを駁す』に於てレッシングの證示したるは、第一に、宗教はその受くる攻撃によつてたゞ主觀的には失ふ所あり得るも、客觀的には反つて常に得る所がある、しかもその得る所は失ふ所よりも大である、といふことである、蓋し喪失の續くはただ反對論が猶答へられずにある期間のみなるに反して、一旦の獲得は同時にあらゆる時代に對する獲得となるからである、第二には、自己の有する眞に最上なるもの、何たるやを解せる教會は、何人に對しても己が宗教と争ふの自由を束縛しようとは欲しないであらうといふこと、しかもこの事（自由を束縛せんとすること）は、侵し難きもの、あらゆる疑惑とあらゆる批評とを超越せるものと考へられてゐる如

き信仰の主要點に關しては、最も尠いであらうといふことである。——果してさうであるならば、教會は如何にして、レッシングの如くに、信仰に對して客觀的に貢獻せんとの善き意圖を以て、單に他人の謬見を公表したる其人をば自己の敵と視ることが出來よう。——レッシングはその『ゲッツェを駁す』第六書に於て告白して居る。猶また『余は性分として、その著者が依つて以て世を教へ若しくは樂しましめんと欲したといふことを余の認める如きものならば、如何なる草稿に、たゞ草稿のまゝに現存せる書物に、對しても全く一種の迷信的尊敬を拂ふ人間である。死若しくは其他の……原因がかくも多くの善き意圖を水泡に歸せしめ得ることを見る時、余は歎息する、さうして余は直ちに、苟くも人間の名に價する何人もが、捨子を發見した際と同じ心持になるのである。彼（發見者）は單に捨子をすつかり死なせてしまはないやうにするだけでは満足しない、……彼は、少くも洗禮を受け又名をも付けられる爲に、その子を育兒院へ送らせるか若しくは自ら連れ行くのである。勿論か

いる場合にも或る子は他の子よりも可愛らしい、何故なら一人の子は他の子よりも多くほゝゑみを見せ、一人の子は他の子よりも更に固く指を押へるから。——ちやうどそれと同じ様に余は（出来る事であつたならば）、ありとあらゆる精神の捨子をば一度に活版所といふ彼等の爲に設けられたる大育兒院へ送り得んことを少くとも希つてはゐる者である。されば余自ら實際其處へ送るものが、假令それ等の中のただ僅少部分に過ぎずとするも、その罪は決して余にのみは無いのである。——今なほフィレンツェのメディチ家圖書館にボルフユリウスの基督教攻撃の著書が一部存在して居り、しかも『何人もそれを讀むことを、何人も其中の極めて僅少部分といふことも之を世に發表することを禁ぜられてゐる程に秘密に保管されて居るといふことが若し眞實であるとしたならば、然らば余は、本當に、フィレンツェの圖書館長ではありたくない、縱令同時に其處の大公であることが出来ても。それとも余は寧ろ、眞理と基督教とに對しかくも不利なる禁令を速に解除し、ボルフユリウスをば速に

余の新店となれる大公の宮殿に於て印刷せしめ且つ、今單に考へて見てさへ既に重荷であるところの大公領をば速に元の政廳に返却するを得るといふ條件の下に於てのみ其處の大公となりたい。』——ベネディクト派の壓迫を受けたアペラールの或る著書に關してレッシングは言つてゐる。『憫れなる古書よ！ 神は汝を導きて余の手に入らしめ給へ、然らば余は慥に、余がベネディクト派の僧ではないことの確かなほど慥に、汝を印刷に附するであらう！——もし獨り同派の僧徒のみが斯かる種類の原稿を猶多く見得るのであつたならば、余は同派の僧たることを殆ど望みかねない程である。もしまた余にして早くも加入した初年中に再び同派から放逐されるとするも、それは何でもないではないか。しかも余は屹度放逐されるにきまつてゐる、何故ならば余は餘り多くを印刷せんことを欲し、同派は反つてこれに對し贊助を拒むであらうから。』

レッシングはあらゆる彼の宗教上、歴史哲學上並に倫理上の見解及び理想をば、凡そ世界文献の有する最も驚歎すべく且つ最も深邃なるものに屬するところの三つの著作に於て、即ち『人類の教育』に於て、『共救團員の對話』に於て及び『賢者ナータン』に於て言ひ表はした。私が『ナータン』を最後に擧げたのは、それがレッシングの王冠を飾れる最美、最純且つ最大の珠玉であり——レッシング其人の人格の最も完全なる藝術的寫像として、且つ又、この偉大なる精神が考へ、信じ、望み且つ愛した所のもの一切の詩的綜合としては——また實際年代順から言つてもその创作者の最後の著作——その辭世の歌(Schwanengesang)——であるべき筈であつたからである。

「デイルタイは(前に掲げたるその論文の中に)『ナータン』について極めて卓抜なる説をなしてゐる。彼は即ち言ふ。『レッシングはその理想をば獨り「ナータン」なる

藝術的形に於て——恐らく(ゲーテの「イフィゲーニエ」と同様に、凡そ人性の眞摯なる研究者のこれを読んで涙ぐまずにはゐられぬ所のこの不朽の詩に於て——のみ毫も餘すことなく我等に貽した。其處には、我等に教ふるに、人生をばあらゆる我等の經驗を超えて更に高きものと考ふることを以てする所の純なる魂の偉大がかくもあり——とかくも眞實に現れてゐる。』又運命に導かれて、『ただ世の中の太い線のみが猶ほ眼下に認められたところの孤獨な高處に達したるレッシングは、その作の中に彼の世紀の理想を言ひ表はさんと企てた。……彼の衷に於て上へ下へと波打つてゐた様々の氣分は、この戯曲中の、今やその最後の仕上げを了りたる、諸人物に於て具體化されたのである。彼は即ち王者たるサラディンの如くに、自ら歴史に影響を與へ得との力の意識を懷きながら、惱<sup>マハトベウストザイン</sup>止つ楽しんで、が、また彼は彼のアルハーフィの如くに、荒野の自由を憧憬した、聖廟騎士に見らるゝ世間<sup>ウエルトフエレ</sup>蔑<sup>アハツングトロツツ</sup>視と反抗心とは彼自らの十二分に熟知せるところであつた、尙續いて生き且つ續

いて活動せんが爲には、彼はナイタンの如くに自分自身に打克たねばならなかつた。かくの如くにして是等の人物の中には彼の人格の核心が在つたのである。さうして彼はその作の結構の裡に、——人間に内在せる道義の力によつて人生のあらゆる暗黒の中から明るさものと及び輝けるものへ導くところの——神的秩序に對する彼の全信仰を披瀝した。彼の作を醇化せる晴朗の氣を以て充溢せしめてゐるものは實に此信仰である。』(一二七頁以下)——

『人類の教育』を形成せる百の短節はレッスングの歴史哲學と、神學と、形而上學と及び倫理學とを含んで居る。尤もレッスングについて語る時には、勿論かくの如き詞は寧ろ使はない様にすべきであらう。かゝる詞は餘りに固苦しく、餘に高慢に學究的である、餘に甚しく書齋のランプや學校の埃の臭がする、しかもこれ總てレッスングの嫌忌した所である。彼は教へない、彼は説教しない、彼は獨斷説を立てない、彼の我等に告ぐる所は、世界及び歴史における神の支配に關する、人間相互の義務

に關する及び各個人並に人類の使命及び將來に關する、彼の假説——或は空想と呼んでも又夢想と名づけてもよいが——である。レッスングは『彼の今日の日に課せられた道程よりも幾分遠くを見渡し得ると信じた所の或る丘の上に』立つ。しかし彼は、ひたすら早く夜の宿に着きたいとのみ思つてゐる様な躁急なる旅人を其道から自分の方へ呼び招かうとはしない。彼は、自分を恍惚たらしむる眺望が必しも亦何れの他の眼をも恍惚たらしめねばならぬと要求する者ではない。『人類の教育』序言) 抑もの冒頭に於て——最初の五節の中に——この篇の根本思想が開陳されてゐる、それは即ち次の如くである。各個人の教育とはその教育によつて與へらるるところの啓示を謂ふのである。——さうして宗教が啓示と呼んでゐるものは人類の神より受け、るところの教育である。——教育と啓示との人間並に人類に與ふるものには、『人間理性が、自分自身に放任せられてゐては、到達しかねるといふやうなものは少しも無い』が、しかし唯その異なる所は、教育と啓示との彼等にこれを與ふるは

『たゞ一層迅速且つ一層容易な』といふことと、又その先づ初に與ふるは、最困難なるものではなくして、寧ろ最重要なるものだといふ事のみである。又人間の教育者が、總てを一度に教へ込み得ずして、一つの計畫に従ひ、一種の秩序に據つてその教子の諸能力や理性を啓發せしむるが如く、神も亦、彼の教育を施すに際し、啓示を與ふるに際して、人類をば計畫的に且つ秩序的にその目標に――完成状態に――導くのである。この神の教育計畫に於ては、諸々の宗教は、言はゞその中において神が眞理をば漸を追うて人類に啓示するところの教科書である。――歴史及び諸宗教をかく解釋することは延いて、あらゆる宗教上の憎悪がましき且つ寛容に乏しき態度を斥けると同時に、かの改善病 (Besserungssünder) に捉はれて、なほ未熟なる個々の人及び國民に對して一層高き道德的並に宗教的觀念をも強ひて押付けようとする如き尙早な改革者等の試むるところの、神の目的と道とに逆行するまた徒勞に歸する啓蒙的努力をも斥けるに至らしめる。――

完成を急ぐことは、各個人及び人類が何時かは開明と心情の純潔との最高階段に到達するであらうといふ事に對して疑念を挟むにも劣らざる冒瀆である。――『大悲者よ、願はくは我をしてかゝる冒瀆を考へしめ給ふな！』『否、それは來るであらう、それは必ず來るであらう、人間が……、隨意的報酬が附隨してゐるからではなく、それが善であるの故を以て、善を爲すに至る如き完成の時代は。』『それは必ず來るであらう、かの新約の入門的諸篇に於てさへ我等に約束されてゐる所の新しき永遠の福音の時代は。』(『人類の教育』第八十一、八十二、八十五、八十六節) 我等は或は言ひ得るであらう、かの教會から異端者と呼ばれたところの第十三乃至十四世紀の或狂信家等は『この新しき永遠の福音より發する一つの光線を捉へたのである、が唯彼等はそれの出現の期をばかくも近きに在りと宣した點に於てのみ謬つたのである、と。彼等の所謂世界の三時代の如きも恐らく必しも甚しく空虚な奇想ではなかつたであらう。又彼等が、新約も舊約の場合と同様に廢れるに相違な

いと説いたのも、勿論何等悪い意圖から出た譯ではなかつた。彼等にも亦やはり同じ神の同じ支配エコンミの信念があつたのである。やはり——彼等をして余の用語を以て語らしむるならば——人類の一般的教育なる同じ計畫の考が。』さうして彼等の狂信者たる所以は、たゞ彼等が、『未だ漸く幼年時代をすら脱するか脱せざる程度に在る』彼等の同時代者を以て、既にかの第三時代に入るに價すると信じた點のみに存する。——一體狂信者なるものは屢々極めて正しく未來を洞觀する、が、しかし彼はまた、それ（未來即ち實現の時）が早く來ること、しかも自分によつて且つ己が生前に招來されることを希ふのである。蓋し、もしその改善されたる世界状態が自分の死後に來るのであつたならば、彼はそれからは竟に何の得るところも無いであらうからである、——彼にしてその改善状態を享樂するために、自ら再び歸り來ることを期待しない以上は。』ところがこの狂信シユウエルグワイ——個人の再來即ち再生に對する信仰——のみが狂信者等の間でもはや流行となる様子の見えないのは奇異である！』（同上第八十七

——第九十節）。——しかしレッシングはそれを持つてゐた、この信仰を、さうしてこれ實に、攝理の歩みが『彼には恰も逆行するが如くに、』もしくは『脇路を行くが如くに見えるやうな時、』その時にすら猶ほ彼をして攝理に絶望することなからしめたものである。——『最も短き線は常に直線なりといふは眞理でない。』——永遠の攝理は其途上に於て携へ行くべきものを斯くも多く、歩むべき脇路をかくも多く有つて居る！——『倅然らば、人類をば完成状態に近づかしむる所の徐行する大齒輪が、一層小さき一層速力の大なる諸齒輪によつてのみ動かされるといふ事が、即ち其等の小齒輪の各々からその個々の動力を受取るといふことが、もはや殆ど全く疑を容るる餘地なき迄に極つてゐるものとすれば如何？』それは極つてゐると言ふより外はない！人類が依つて以てその完成状態に達する道は、これ正に各個人が——此者は早く彼者は遅く——先づ通り抜けることを要するものである。——勿論それは同一の生涯に於ては困難であらう。』が、然し何故に各個人はまた一度以上この世に在り得なかつ

たであらう？』——この假説は最古のものなるが故にしかく滑稽なのであるか。』——  
『何が故に余は、余に新らしき知識や、新らしき技能を獲得するの素質ある限り、幾  
度でも復歸することが可能でないといふ筈があらう？ それとも假令再來するもそ  
の勞の或は酬いらぬ虞のある程に、しかく多くを余は、一度に携へ去るのである  
か。』『或はまた余自ら既に一たび此世に在つたことを忘れてゐるが故であるか（再  
來説に反對するのは）。……しかも余が今は忘れねばならぬものでも、余は一體そ  
れを永遠に忘れてしまつたのであるか。』『或はまたかくては（即ち幾度も復歸する  
ものとすれば、余にとつて餘りに多くの時が失はれるからであるか——失はれる？  
——また一體余は何を逸すると云ふのか〔何も急ぐ必要はないか〕』全永遠は余のものではな  
いか。』（同上第九十一—第百節。）——

\* \* \*

更生 (Palinogenesie) の説は、レッシングに於けるが如く、同時に進化説でもある  
時、詳言すればそれが我等の舊き既に拋棄したる形相フォームに於て、我等の前生において  
有したる肉體的並に精神的限界を一も脱却することなくして行はるゝ、地上生活へ  
の單なる復歸を主張せずして、むしろ、その過去の生存において既に經來れる低級  
の諸階段をば最早通り抜けるを要せざる如き、何れの點に於ても、一層完全なる者と  
して、一層高き進化階段に於ける再生を容認するとき、その時始めて一種の哲學的  
並に倫理的價值を獲得するのである。——レッシングが再生をば偏にかく解したこ  
とは——輪廻 (Seelenwanderung = Metempsychose) と見ずして、寧ろ靈魂の變質  
(Seelenwandlung = Metamorphose) と見たことは——獨り『人類の教育』の最後の  
諸節及びかの『人間は五つ以上の感官を有するを得べし』(Lilios. Nachlass) と題  
する簡短なる屢々看過される、しかも注意すべき論文からのみならず、猶またこの  
美しき信仰がレッシングの全宗教哲學並に歴史哲學に對して有するところの意義に

徴するも既に明かである。もし人間が、此世を去るに際して有したると、全然同様の知的並に道徳的狀態を以て再來するに相違ないものであつたならば、神が世界と各個人と人類とを導き行かんとする最終目標たる未來の完成は如何にして到達し得られるであらう？

一切の被造者は完全狀態の來るのを待ち望んで居る、——獨り我等人間のみならず、なほ亦あらゆる人間以下の者も、しかも彼等の待望は徒勞に歸しはしない、蓋し神は生ある者皆を自分の方へ喚召するも、たゞ純なる者及び完き者のみを己が裡に收容するからである。『萬物回歸』(Apokatastasis)の觀念は更生説から自然に出て來るところの最後の結論である、しかもかく結論することは、惟ふに、恐らくレ、シンの精神に不忠實となる所以ではなからう。——神との此合一——神の國——は然し、なほ我等の(地上の)世界に於て演ぜらるゝところの、人類の歴史の最後の幕によつて、換言すればあらゆる人とあらゆる人との地上に於ける最後の永遠なる結合、

同胞化、和解、——即ち世界の進歩を促す共同の仕事を目的とし、また神の仕事に(死者をも包攝せる彼(神)の國の建設に)協力するを目的とするところの、あらゆる民族と、あらゆる國民と、あらゆる人種と、宗教と及び宗派とより成れる、平和と愛との上に立つ聯合(Friedens- und Liebesbündnis)によつて道を拓かれ、準備せられ、輪廓を與へられるのである。——これ實に慰藉に富める、人を幸にするところの思想である！『聖徒の共同』(communio sanctorum)に對する信仰はこの思想の上にその基礎を置いてゐる、且つこの信仰は多くの近代思想家の懐いてゐた所であつて、其中には亦ロツツェも在る。彼は言ふ、『人間心情の最も注目すべき特質の一つは、一方個々の場合にはかくも多大の利己心を示すにも拘らず、何時の時代もその未來の時代に對して一般に嫉妬心を抱かないといふことである。……この驚異すべき現象は、其處では常に過ぎ去つたといふものが無いのみならず、寧ろ、歴史の時間的經過のために互に接近し得ざる如く相隔てられたる一切のものが、一種の非時間的なる



交通の裡に相交はり相接する如き、また其處ではこの経過が造り出したる諸々の寶が、その獲得を幫助しながら、しかも自らそれを受用するに至らずして世を終つたといふやうな人に對しても亦失はれざる如き、超地上的關係状態がなほ外に存在するとの信仰を恐らく我等の衷に確立し得るであらう。『未來にとつても我等は失はれないであらうこと、我等以前に在つた者は成るほどこの地上世界からは去り行いたけれども、あらゆる實在から消え去つたのではないこと、及び歴史の進歩は、如何なる不可思議な仕方で行はれようとも、なほやはり彼等に對しても亦遂げらるゝものであることの豫感。——この信念があつてこそ始めて、人類とその歴史について我等の普通用ゐてゐる如き説き方は許されるのである。』普通の説き方とは即ち、人類なるものを以て、『時間的に相懸隔せる諸多の精神をば猶能く相互關係(Füreinandersein)より成れる一全體——その裡では、恰も總ての人が數へられてでもゐるかの如くに、各人のためにその獨特の地位が豫定せられ且つ保留されてある

如き全體——を形成するやうに聯合せしむるところの眞實の且つ生ける共存状態なりと做すことである。』またそれは歴史が『未來及び過去なる、全然たる虚無である二つの深淵の間を進み行くところの實在の狭小なる光線』ではなくして、むしろ『生起と消滅との飛動をば永遠の現在に壓縮したる永續的總和であるといふことである。人間心情がその努力に際し、祖先の靈や又は未來の榮譽を頼りにすることによつてを得る場合には、それは次の如き意味において起るのである。虚無なるものに頼つことは總じて無効である、力強きは獨り、かくの如き萬物の保存(Aufbewahrung)と回歸とを信ずるこの思想によつて生々と充分に充たされてゐる所の頼りのみである。』(Mikrok. III, S. 49f. 51f. Vgl. Dilthey, a. a. O. S. 165—172).

\*

\*

\*

\*

レ、シングは地上に於ける「聖徒の共同」の理想の大體の輪廓をば、クロノフ

「インジャー」が正當にも『對話篇としての傑作』と評したところの、その「エルンストとフランク、共救團員の對話」の中に描いて居る。―それは五篇から成つてゐる。最初の三篇は一七七八年に、最後の二篇は一七八〇年に出た。レッシングの解したる共救團の觀念をその根柢と成せる『ナータン』の完成されたのは上の作中第三と第四對話製作の中間期に當つてゐる。―

レッシングは夙に共救團 [Freimaurerei od. Maurerei = freemasonry]

共救團とは相互扶助と兄弟

の如き感情により結びつけられたる同胞的親和の生活を目的とせる一種の秘密結社であつて、團員の間では複雑なる儀式や特殊の暗號が行はれて居る。尙これについては Borne's Ueber Freimaurerei なる文（レクラム版第一卷）を參照せられたい。』の歴史を研究してゐた、さうしてハンブルヒに人を訪問した際に、

彼は亦同地のロージエ [Loge この語は此處では共救團其者の意なるも、また共救團員の集會所を意味する場合もある。] へも加入した、

彼が其處で見出したものは幻滅の外何物もなかつた、さうして或人が彼に向つて、ロージエに於て何か反宗教的もしくは反國家的なものを見出したかと訊いた時に、彼は答へて、『天が若し幸に私をして其種のものなりとも見出さしめてくれたのであつ

たならば、然らば、私は其處で少くとも何かを見出したであらうに！』と言つた。

しかしながらレッシングは、ロージエについては、換言すれば現實ありの儘の共救團については斯くも輕蔑の口調を以て語つてゐるとはいへ、それが達すべき且つ未來に於て達するであらう所の状態に於けるこの團體の觀念に關し、倫理的宗教的意義及び文化史的任務に關しては彼は全然別様の判斷を下してゐる。共救團員集會所の共救團に對する關係は、恰も教會の信仰に對するその如くである。我等は、何れの宗派にも屬せず又基督者と呼ばれなくとも、なほ善き基督者であり得るが如く、また、ロージエに屬せざるも猶ほ能く共救團員であり且つ共救團の本領の何れに在りやを熟知することが出来る。『共救團は何等隨意的のものでも、何等事缺き得るものでもなく、むしろ、人間及び公民社會の本質に基礎を有せる一種の必然的なるものである。従つて我等は、他の教示によつてそれ（共救團）へ導かれると同様に、自己の精思によつても亦必然それに落ち行き得る筈である』とレッシングは説いてゐる

る。——『共救團はいつの世にも在つた。』『共救團員の眞誠の事業は、「これは彼等の爲したところだ!」と人の言ひ得るに至る迄には、幾世紀も経過することのあり得る程、それ程偉大にして、それほど前途の遠大なものである。とは云へ、今なほ世に在る一切の善きものも彼等によつて成されたのである、また彼等は、なほ今後世界に於て生起すべきあらゆる善きもの、爲にも引續き努力することであらう。彼等の目的とするところは即ち、人の普通に善行と呼び習はせるもの一切の最大部分をば事足り得るものとなすに在る。』——彼等の目的は『最良の政治の行はれてゐる國家に於てすら必や發生するに相違ないやうな』害惡を芟除することである、純眞なる共救團員とは即ち『民族的偏見を超越せる、且つ何時愛國心が徳ではなくなるかを精密に知れる人々であり、その世襲的宗教の偏見に捉はれず、自己の善と認め眞と認めるものが總て必然的に善なるもの眞なるものであらねばならぬとは信ぜざる如き人々であり、また社會的高地位によつて眩惑せしめられず又社會的微賤に對

して嫌惡の感を催さざる人々、かつ地位高き者は喜んで謙り、また微賤なる者も大膽に頭を擡げる如き交際振を喜ぶ人々の謂である。』——約言すれば、共救團の觀念とは、現今諸々の宗教と民族とに、諸々の國家と階級とに相隔離せる人類の間に同胞關係を樹立することである。——さて『共救團員の對話』のこの根本思想は『「ナタン」に於て象徴的に言ひ表はされてゐる。レッシングは即ちこの作の中に三つの相敵對せる一神教——猶太教と、基督教と及び回教と——をばサルタンの家庭に於て相會合せしめさうして互に平和の交を結ばせてゐるのである。これは永遠の平和である、何となればそれは『ある一定の既成宗教の翼の下に於ては達成されずして、反つて理性と人道との宗教、即ち唯一の普遍的宗教——個々の宗教はそれから離散しさうして疎遠となれるその子供である——の腕に抱かれて』(D. Strauss) 實現されるからである。——遠き未來に屬するこの唯一の宗教は即ち、高齡のヨハネがその『遺言』に於て『子等よ、互に相愛せよ!』なる數語に要約したところの、純

粹無私なる愛の宗教である。

かの『より賢明なる人』——『幾千年の後に其人の審判席の前へ出るやうにと、三つの指環に關するナータンの譬喩の中の『謙遜なる判官』が、相争へる兄弟等の『子の子のまた子達』に求めてゐる所の『より賢明なる人』——は、實の所もはや何等の判決すべきものをも持たぬであらう。失はれたと信ぜられたる本物の寶石は其時には發見されてゐる、さうしてそれは最早兄弟の中の誰かただ一人にのみではなく、むしろ各人と且つ萬人とに同時に屬することとなる、——これ正に、その眞誠の信奉者をば『神と人との前に快き者となすの祕力』ある基督の宗教である。

此處で私はこの一篇を結ばうと思ふ！——私が若し、哲學者並に神學者としてのレッシングを説く代りに、詩人、美學者並に藝術批評家としてのレッシングを論じ

たであらうならば、わが『制作』の如き、藝術の利益に奉仕する雑誌に於ては、それは一層適切であつたらうと、かう考へる人も讀者諸君の中には屹度多いに違ない。それは慥に一層適切であつたらう。けれどもまたさうすれば、私はわが讀者の既に屢々聽いたに相違ない所のものについて語ることになつたであらう。私はしかし諸君に何か新らしきものを齎さんと欲した、然るにレッシングに於てはこの新らしきもの、もしくは知らるゝところの最も少きもの、しかも私一個にとつて最も價值多きものは、正に彼の歴史哲學及び宗教哲學である。——要求する所多からざるこの一文にして若し讀者諸君を促してレッシングの研究に向はしめ且つ同時に、何故に私がレッシングを愛好するか、彼をば——ディルタイの言へるが如く——我等にとつて『徹頭徹尾なほ現在せる者』、最も時代に適切なる思想家の一人と做すか、何故に私が彼をば私の師と生涯の伴侶との中に數へるか、又何故に私が、日本人の間に有する私の友人等——今や自ら青年の教師たり助言者たる地位に在る私の舊き弟子等——

にとつても亦彼がかくの如きものとなれかすと願ふか、を理解せしめ得たならば、私は幸福であらう。

## +

カール・ヒルティ

„Du bist sehr eilig, meiner Trenn!

Du suchst die Tür und läufst vorbei.“

Goethe.

「げに汝はいたく急げるかな！ 汝は戸を索めて、しかもその前を走り過ぐるなり」ゲーテ

## -

亡友マックス・クリストリーブがヒルティの著書『幸福』に對して私の注意を促してくれたことは、私の何時までも彼に感謝するところである。さて爾來優に二十年の歳月が過ぎ去つたが、初めてざつと彼の著書に親しんだ際早くも直ちに感ぜざるを得なかつたところの、この著者に對する大なる尊敬はその後次第／＼に友情に移

つて行つた。ヒルティは私の生涯の伴侶となつたのである。我々兩人の見解や好尚の間には幾多の相違が存するにも拘らず、私は彼と交ること長ければ長いほど、また私が彼の著作に親むこと精しければ精しいほど、彼を尊重し且つ愛好するの念はただいよ／＼益々深くなるばかりである。ヒルティは、私にとつては眞であり且つ一種の價値を有する多くのものに對して、極めて冷淡なる、殆ど拒斥するが如き態度を取る。例へば我が(獨逸の)大詩人や大思想家に對しては彼は餘り愛好の情を示さない、また彼等に對しては餘り感覺を持つてゐないらしい。總じて私は彼の文學上の嗜好には必しも常に同意を表することは出来ない。ゲーテ、シュラー、シローペンハッター、ヘーゲル其他に對する判断に於ては私と彼とは屢々全く見るところを異にする。また汎神論に對する彼の反感に至つては全然私の理解し得ざるところである。ヒルティの如き人が如何にして汎神論をかくまで誤解しさうして(正當にも彼の拒斥せる)無神論及び唯物論と共に、反基督教的にして且つ總じて反宗教的なる教説

の中に數へ込むことが出来たのであらう！彼及び凡そ眞に信仰あり且つ教養ある基督者の等しく解してゐる如き基督教は、やはり屹度亦汎神論でもあるといふことは、彼も承知してゐるべき筈であらう！勿論それは、ヒルティが汎神論について語るとき、常に想到する背理即ち神は一切なるが故に、若しくは一切は神のうち在るが故に、一切の物も亦、—私が今これを書いてゐる机も亦、—神でなければならぬといふ如きことではなく、むしろ基督教的考方まで引上げられたる、有神論から離れることの出来ぬ汎神論なのである。その全能なる意志によつて一切を生起せしめ且つ一切を支配し、また人間が何れの瞬間にも直接に交通し得る、さうして我等の神と呼ぶところの、知覺し得べき世界の背後に存する遍在的インテリゲンツ 知に對する信仰なくしては、凡そ宗教なるものは存しない。遍在にして全能であることは、活ける、一切を生氣レヴィテづけ且つ維持するところの神の有するあらゆる性質中最も自明にして最も拒否し難きものである。誰かこれをヒルティ以上に知つてゐる者があらう！し

かし遍在とは(何を意味するか)！

„Allgegenwärtig' sagst du, Christ,

Und weist nicht, dass du also bist

Ein Pantheist,

Der dir ein solcher Schander ist.“

Rückert.

『基督者よ、汝は「遍在」と言ふ、しかもかくて汝も亦、汝をかくも震へおのよかしむる、汎神論者たることを知らざるなり。』

リニッケルト

少くとも私は、如何にして例へば聖オラメント奠の、特に聖餐禮の効力を信ずることが出来、しかもそれと同時に汎神論的なる神の觀念(基督教的な世界觀の要素としての)を拒斥し得るかを未だ曾て充分に解することが出来なかつた。

猶この外幾多の點に於て私とヒルティとの間には意見の相違が在る。また彼の叙述や表現法の上にも、私は時々多少批難すべき點を見出すのである。然しながら私は其他の點に於ては、しかも、何人にとつても最重要である若しくはあるべき筈の

ものに關しては、全然彼に同ずる者であるが故に、上に述べた如き意見の不一致は我等の間を分裂せしめることは出来ない。のみならずそれ等は實際全く非本質的なもの及び外面的なるものに關せるもので、それに就いては論争すべきものではないのである。

\*

\*

\*

\*

ヒルティの著書の何處を開くも、何れの書に於ても又殆ど何れの頁においても我等は明晰に單純に且つ決然として述べられたる卓越せる思想に逢ふ。しかも是等の思想たる強固なる信念に根ざし且つ人間に關するその知識と及び内面的生活の領域に於ける自身の經驗との如何に深大なるやを語るものである。ヒルティは、我等の時代がかくも豊富に産出するところの動搖常なき、永久に索むるをこれ事とせる、過度に批評的なる人々には屬しない。彼は決してその讀者をして彼の意見の在ると

ころを知るに苦まじむるが如きことは無い。彼は簡短に且つ常に積極的形に於てその所見を述べてゐる、彼は既に完成せる、自分自身の始末のついた獨立自足の人である、さうして既にその故に——特に年若き人々の——師となり、忠言者となり且つ友人となるに極めて適してゐる、しかも彼れ程この任に適せる者は近代の作家や『俗人説教家』の中にもただ僅しか無い。『私にして他人の意見を聴かされる場合には、その意見は積極的に述べられることを要する、——問題<sup>フロブレマ</sup>的なるものならば、私自身の衷にも充分在るのだから、』とゲーテは言つてゐる。また私の友たり得るのも、單にその考へ方や生き方が私に似通つてゐるといふだけではなく、尙またその所信の確乎不拔なることにも私が信賴することの出来る、且つその傍では私が安全の感じを持ち得る如き人物のみである。然るにこの問題的なる、特相を缺ける、不定なる、著作界の饒舌 (Geschwäbhel)、それも特に藝術や、宗教やまた道徳に關するものこそは、これ實に當今多くの人を惹きつけてゐる所のものであつて、ま

たそれは學問的、哲學的、『批評的』にして——これは現今『研究家』に對する最高の讚辭として用ゐらるゝを常とせる語であるが——深く堀る者として認められるのである。——

ヒルテューは日本に於ても少からず又種々の方面に於て、否、學校に於てすら讀まれてゐる。けれども常に正當に尊重され、その眞實の價値に従つて評價されてゐるであらうか。——蓋しそれは覺束ない！ 教育家や又公の教職に在る二三の年下の友人等の言ふところに依つて判斷するならば、私は恐らく、ヒルテューは充分には尊重されてゐない、屢々低く評價され、誤つて解釋されてゐる、しかもそれは、私の觀る所を以てすれば、餘りに躁<sup>フリュヒヒテ</sup>急に、不精密に讀まれる爲であると言はざるを得ないであらう。して見れば此處でも亦、名前は事柄よりも多く知られてゐる譯である。

——序ながら私は既に、殆どわが耳を信じまいとした程に間違つて歐羅巴人がヒルテューを評するのを聴いたことがある。自分でもヒルテューを讀んだと主張し、また



恐らく實際讀んだでもあらうと思はれる人が、彼を以て世に背ける神祕家となし、かつ『幸福』をば危険な、不健全な書物と評し、更にヒルティの崇拜家たりし或る私の知人が佛蘭西において遂げた自殺の原因をばこの書物の影響に歸することが出来たといふ事は、實に殆ど信じ難き所である！『幸福』を以て道徳的に有害なる、自殺に誘導する書と做すとは！かくも亂暴なる仕方にてヒルティを誤解することは、望むらくは、日本人の間に有する私の友人等の中の一人として能くせざる所であらうが、しかし他の仕方にては（彼等も亦誤解してゐるのである）彼等がこの著作家にその當然受くべき大なる尊敬を拂ふことを妨ぐる所以のものは、彼等に宗教上並に人生上の經驗の缺如せること以外には、ある種の教へ込まれたる偏見（成心）であるやうに思はれる。第一には、凡そ見解や教説は、たゞそれ等が一つのシステム（體系）の形において叙述されてゐる時のみ學問的並に哲學的價値を有するとの、極めて廣く行はれてゐる奇怪なる意見、第二には、歴史的基督教（ヒル

ティも奉じてゐる所の）をば、既に克服されたる、時代後れにして、今の世の中には役立たざる、否、不可能なる信仰と做すこと、第三には、我等の生の最後の目標及び目的としての『幸福』の追求は純粹眞誠なる道義に背反するとの見解である。——奇妙なことである！ヒルティの如く單純にして明瞭なる著作家が、かくも高貴にして自由なる思想を有する且つ時勢に適せる教師が、かくまで甚しく誤解されるとは！我等は殆ど、日本において彼を更に一たび推薦せんと、否、辯護せんと誘惑を感じる程である！しかし既に私の充分屢々推薦した所のもの、また縦令多くの人に誤解されてゐるとは言へ、しかも總ての人に知られてゐるものを、猶も推薦するは推しつけがましき業であらう。のみならず辯護は不必要である、何故ならばヒルティは私の知れる限りでは、日本に於ても歐羅巴に於ても未だ嘗て攻撃されたことが無いからである。この處に於ても亦私は、何故にヒルティが私に好ましくあるかといふ點のみを説明するに止めようと思ふ。——總て書籍に關するこの

種の推薦や、辯護やまた批難は一般に全く不必要なる仕事である！ それらがその目的を達することは稀である。如何なる讀者も經驗もしくは省察によつて別の見解を教へられる迄は、己が所見を改める者ではない。私が讀者に與ふるを敢てする唯一の好意的忠言は、先入の見を棄て、ヒルティイを読み、この著者の考方に能く親しみ、その中に沈<sup>フエアティイフエン</sup>潜し、さうして己が生活をそれに従つて整頓するやうに試み給へ、との一語である。この試みる (Versuchen) と云ふことこそは、これ實にヒルティイ自らが、魂の平和と精神的健康並に自由とを即ち『幸福』を見出し得ざりし又は失ひたる、かつ人生に於てそれに到達し得ること、その可能なること、を否認する一切の人に向つて先づ第一に勸奨してゐる所のものである。

さて私の觀る所を以てすれば、各個人並びに人類が依つて以て幸福に達し得べき途をヒルティイほど明瞭に指示した者は近代の著作界にも他にその例が無いのである。——私は彼の著書を読む前にも、基督教につき、人生につき又人間に就いては、

常にひそかに彼と同じ意見を懐いてゐた。されば已にその爲にも『幸福』を読むことは私にとつては幸福であつた。私はこの書の中に私自身を發見した、且つそれは同精神を有する現代の傑れたる一人格によつて私の諸信念を強固にし、心の落著きと鼓舞とを與へてくれたのである。

\*

\*

\*

\*

凡そ生きとし生ける者は、——人間であれ、動物であれ將た又植物であれ、——生ける且つ意欲する者なるが故に、本然的に幸福の追求者である。この本能に反對して之を克服せんとするは、矯飾か、虚偽か、然らざれば理解力の缺乏に過ぎない。尙またその背後には誤れる若しくは偏したるカント主義が潜んでゐるやうに見える、しかも疑もなくその背後に潜み居れるは、愛によつて人間を自由にするも、實行不可能なる律法によつて奴隷の如くに束縛したり又彼に向つて不必要なる過度の禁慾

を要求したりするが如き事なき基督教の精神に對する理解の全然たる缺如である。一部の『高く翔ける精神達』には基督教及び更に多く舊約聖書は、『徳行に對して報償を約するが故に崇高さが足りないのである。然るに基督教は彼等よりも能く人間を知つてゐる。ザイラー監督は正當にも之について言つてゐる、「基督教はその在るが儘なる具體的 (in concreto) 人間のための宗教である。理性宗教は、實際には存在せざる抽象的 (in abstracto) 人間の爲の宗教である」と』。(幸福 第二卷、二五〇頁、第一脚註。)

この主義に幸福主義とか、快樂主義とか其他その好むがまゝの汚名を負はせて、これを低級なる道德的立脚地と做すは人々の自由である。が、それにも拘らず依然として争ひ難きは、遁世的なる基督信者及び佛教徒並に最も自負心強き厭世家よりストア哲學者に至る迄、凡そ人間といふ人間が、幸福追求の一點に於ける程それほど一致してゐる點は他に一つも無いといふ一事である。『それはあらゆる學習と努

力との、あらゆる國家的並に教會的組織の最後の根據である。』(幸福第一卷、一七九頁及び註)——我等の生ける如き陰暗にして不安なる時代に於ては、『幸福』なる語は確かに一種の『沈鬱なる調子』を帯びて來る。幸福が説かるる時には、一種の『ひそかなる歎息』が一緒に響いて來るやうに思はれる、さうしてそれは、何時かは幸福になれるといふことを人々の疑へることを暗示するものである。

ヒルティはこの疑を克服せんと努めてゐるのである。彼は我等に示すに、幸福は決して幻想<sup>イリュージョン</sup>ではなく、寧ろ一種の實在<sup>リアリティ</sup>在であつて既にこの世に於て見出すことの出来るもの、従つて幸福問題は解決され得るものなることを以てしてゐる。しかもそれは基督教によつて、即ち基督の精神によつて、權利上では (de jure) 即ち理論上では) 既に何人にとつても解決されてゐるのである。なほ残れる問題はたゞ、この基督的精神の勝利を事實上 (de facto) 『個々の場合に於ても亦効力あるものとなし且つ追求するに在る』(而もこれ實に基督教的世界觀の根柢を成すものである)。

〔眠られぬ夜、一月三十一日、四月十九日。〕語を換へて言ふならば、それは即ち人生のあらゆる境遇に在つて、思念の上にも、言説や行爲の上にも、常に眞誠の基督者たるの實を示し、眞誠の基督教に對して始終變ることなく忠實であることである。

基督の詞の——如何なる他の權威のそれでもなく！——疑もなく眞理なることを徹底的に確信してゐるといふこと——これ實に「基督教とは何ぞや」との間に對する簡單なる答である。（眠られぬ夜、六月二十七日。）この（基督教なる）語をば、基督の風と考方の中に這入つて行くこと以外の意味に解するや否や、それは誤れる概念となるのである。また基督教とは果して本來如何なるものであらうかと言つて、到る處訊き廻る人があつたならば、彼が眞實の基督教を欲する者ならざることは、已にその一事に徴するもほほ推察し得られるのである。（眠られぬ夜、九月十七日。）基督の詞並に精神は頗る單純にして何人にも了解し得られるものである、が、彼

の本質と彼の一生の神秘とに至つては正にそれとは反對にウネンアグラノンノリヒ闡明し難きものである。また我等に於てもそれを闡明すべきではない。「クリストロジー基督教論」——これは實際妙な詞であつて、それに對しては躊躇するところなく不關焉の態度を取つて差支の無いものである。何となれば基督は我等と同じ種類のまた同じ生存條件の下に在る一人の人間であつたか、若しくは彼は我等とは違つて、如何に少くとも、彼の前にも後にも未だ曾てアベントあらざりし如き程度に於て、若しくは更に適切に言へば、仕方を以て、神から魂づけられたる者であるか、孰れかでなければならぬ。然るに前の場合においては特殊の基督論といふが如きものは毫もその用無く、寧ろ一つの良好なる傳記が必要とせられよう、且また彼の生涯と彼の活動とを説明するには、それで充分であらう。しかしさういふ傳記を書いた者は慥に未だ曾て無かつた。(一)また後の場合に於てはかくの如き性質、もしくは二重性質（もしかう呼びたいならば）を説明することは全然不可能である。〔眠られぬ夜、十月十日、九月八日參照。〕基督の性質について言ひ

得る唯一のことは、彼が『完全に且つ不斷に』神を衷に宿せるところの、此世に生存せる、歴史上の人間的人格であつた、といふことに外ならない。『新書簡集、三〇七頁。』基督を神の化身と呼ぶことは私の毫も躊躇せざる所である。が、勿論それによつて少しも説明された譯ではない。基督の本質の説明、もしくは概念の何であるかは總じて餘り重要な問題ではない、が之に反して彼に對する『衷心よりの傾倒』には一切が懸つてゐる。(眠られぬ夜、九月八日、十月一日。)この傾倒若しくは愛を我等が有することを證示するの途は、基督の追隨者たらんと、即ち我等萬人の唯一の師<sup>マイスター</sup>且つ主たる彼の如くに、常に神の傍に在り神に奉仕せんと努力するに在る。—『神に遠ざかるといふこと (Gottesferne) は我等の遭遇し得る唯一の大なる不幸である、が、しかしこれは決して我等の意志を俟たずして來るものではない。』(眠られぬ夜、七月二十六日。)されば神の傍に在るといふこと、若しくは神の靈が我等の魂のうちに『宿る』といふこと及び彼への奉仕の仕事は、これやがて我等の

唯一の眞誠の幸福である、然るに我等にして未だ若しくは最早それを持たないならば、その罪は我等自らの上に在る—即ち神が我等の許に來つて戸を叩いたとき、我等は彼のために戸を開かなかつた、さうして彼に奉仕する者となることを拒んだのである。(眠られぬ夜、七月十五日、六月四日、二月十三日。)『神に奉仕する』とは、その生存中の如何なる瞬間においても、その有する一切の能力と手段とをば神意の成就のために用ゐるの謂である。』かくの如き生活が、しかも獨りかくの如き生活のみが眞誠の『禮拜』(Gottesdienst)であり又もはや曇らざるゝの虞なき法悦を與へる。(眠られぬ夜、十一月十九日。)

(一) 私はこの機會を捉へて、ケーベル先生自らも非常に愛重して居られる、がしかし、我國に於ては未だ殆ど知らるるところなき、普通耶蘇傳と呼ばれてゐる、ロゼッガー(Peter Rosegger)の名作 I. N. R. I. Frohe Botschaft eines armen Sünders に對して眞摯なる讀者の注意を促さうと思ふ。この書は實は耶蘇傳と稱すべきものではなくして、寧ろ『宗教的に深く感じ且つ直觀する一詩人』の手に成れる福音書の“eine Nachdichtung”である。詳言すればそれは詩人のファンタジーによつて

四福音書をば一つの生ける全體に纏めあげたる驚歎すべき、獨特無二の、又實人生のために書かれた、而も『單純なる神の詞』を求めて丁度その求むる所のものを見出し得ざるシンプルな純眞な基督者の要する如き耶穌一代記である。が、これはまた、基督者たる否とを問はず、あらゆる善人にとつての一慰勵書 (Erbauungsbuch) である。この書一たび出づるや歐羅巴に於ては『神學者等からは激しく批難され、單純なる宗教心情の人々からは非常に賞讃された』といふことである。

人間は、己が救を<sup>ライ</sup>求むるならば、この世の生活から——地上の生活からとの意味ではない！——脱出して、我等萬人のために神の定めたる故郷に行くことを要する。モーゼ第一書(創世記)の第十二、第十五及び第十七章の冒頭に在る、神のアブラハムに告げた三つの詞は、既に誠の生に達する總ての人の内的生活過程を叙してゐる。それは即ち『先づ第一には、一層善き、一層淨き生活に達するの妨害となるべき、その慣れたる周圍と作業とを脱出離去すること、次には神以外の何者をも恐れずして、獨り神にのみ注意を拂ふこと、最後には、偏に神の御顔の前を先へと進むことである。』(眠られぬ夜、十二月十一日。)

神以外には何者をも恐れない！ 此處では『恐れる』といふ語の代りに何か他の詞を置いたならば、恐らく更に適切であらう。『恐れ』の概念には、餘りに人間的な且つ感覺的な、ヒルティー自ら正當にも神の概念と兩立し難いと言つてゐる如き、一種の觀念が結びついてゐる。詳言すれば、我等に害をなす或者の、例へば『怒を發し』罰を加へ、暴君的に直接我等の生活に干渉する如き存在者の及び其他の觀念が、加之ヒルティーは神に對する我等の關係をば『父の愛』と呼ぶことをすら欲しないのである、それは之について我等の有する『幼年時代の思出は決して常に獨り好きものゝみとは限つてゐないからである。』我等が神から求め且つ神に於て有するところのものは、『始終懇<sup>フロイユド</sup>ろなる、慈悲深き、常に堂々<sup>グロースアルタイヒ</sup>として宏量なる、徹頭徹尾誠實なる、何物をも掩飾 (beschönigen) もしくは看過せざると共に、また如何に些細なる善といへども之を認め且つ常に喜んで助力を與へんとする偉大なる主君<sup>ヘリクニヒ</sup>の態度である。』(眠られぬ夜、二月十八日。) 否、我等の神に對する關係は更に一層親密にして自

由なる形を取ることも出来る。――基督教に於て絶妙なるは、神の絶對的完全性も神にとつて、人間の如き不完全極まれる存在者と――ただ兩者が互にそれを欲する意志さへ抱くに至るならば――直ちに、『あらゆる人間的交友を遙に超越せる、かつ魂に充分なる満足と與へる如き、友交關係に入るの障礙となるが如きことが毫もないとの信仰である。』（眠られぬ夜、十二月十三日。）我等は舊約聖書に傳へられてゐる多くの人達の如くに、『神の友』となることが出来る。『しかしそれは一體何故に、古き過去の時代には可能であつたに拘らず、現今に於ては全然不可能なのであらう？』（新書簡集、三〇八、九頁、書簡集二一九頁以下。）『基督自らも決して神を怒り易き父として描いたことはない、かの失はれたる息子の譬喩の如きはかく神を観るに最もふさはしき場面であるが、かの場合に於てすら彼はさう觀なかつた、猶また舊約聖書はその最も美しき箇處に於ては此見方を採つてゐない。』ヒルティはその例としてエザヤ書第四十三章第十八―二十五節、第四十八章第九―十一節を引用して居る。が、私は恐

らく最も美しい例として更に列王紀略上、第十九章第十一、十二節を引用したい、之によればエホバは自らを豫言者エリヤに示すに、天地を震撼せしむる自然現象の裡に於てせずして、寧ろそよ吹く風の中に於てしてゐるのである。猶また私は、これと同じ思想を述べたるゲーテの『ファウスト』（天上の序言）中の首天使ミヒヤエルの歌に向つて讀者の注意を促したる。

『さて海より陸へ、陸より海へと、  
暴風雨とあらしと互に吼え競ひ、

狂ひ立ちて四面にいと深き

因果の連鎖を造り出す。

その時轟く雷のゆくてには

物鏡きつくす稻妻閃き渡る。

されど主よ、主の御使等は

主の目の穩かなる推移を崇めまつるなり。』

『然るに人間が其後頭この種の「神に對する恐怖」によつて幾百萬の人々に神の（即ち神に對する）信仰を嫌忌すべきものとしてしまつたのである。神の「怒」は主として、神が我等の生活から離れ去ることに存する。かく神に遠ざかる結果人生は、一切の現世的財寶を領有し且つ學問や、藝術や、交通の上にはあらゆる進歩のあつたにも拘らず、内面的には現代に於けるが如く荒涼にして慰藉なきものとなるのである。土地は昔も今も同じものである、否それは恐らく以前よりも開けて來たであらう。しかし太陽が缺けてゐる、且また凡そ人間的所作に伴ひ居るべき筈のまた伴ひ得る所の（上よりの）祝福（Blessing）なるものが無い。』（眠れぬ夜、二月三日。）——かく太陽と祝福との缺如するに至つたのは我等の罪であつて、それは蓋し我等が氣儘に一切の光明と一切の善との源泉たる神に背き、彼との「交り」を抛棄し、依つて以て世界に惡の入り來ることを許容したが爲である。その故は我等人間にとつては惡とは自ら好んで神から遠ざかるとに外ならないからである。しかも惡の本體の

果して何であるかは、『我等の全然知らざることであり、且つ又それを知るとは恐らく我等の到底堪へざる所であらう。』然しそれは兎に角、我等を慰むるに充分なるは、たとひ我等にして神に遠ざかるとも、遍在者且つ大慈悲者たる彼は我等を見棄つることなく、その後の戸を鎖さず、何時にても喜んで我等と和解し再び一緒にならうと欲してゐるといふことである。（眠られぬ夜、十二月十三日。）我等は二つの謬見によつて最も屢々善から遠ざけられる。第一は、我等が將に何か惡事を爲さんとする際には、『これはさう大して悪い事ではなく、寧ろ世間一般の慣はしであり、また結局この行爲の故に自分は必しも善人でなくなる譯ではない』と自分で自分を説服することである。そして惡事をしてしまつた曉には、改心して神の赦を得ることが我等には最早不可能と思はるるに至るのである。これ第二の謬見であつて、特にその克服に努めなければならぬものである、何となれば『神は如何なる悔改をも——それが如何に遅れて且つ如何に多くの（惡への）後戻りの後に爲されても——



斥けはしない、また我等の主(基督)は力若しくは平和を得んとて彼に頼り來る者ならば何人をも斥けるが如きことはない、——私は重ねて明確に言ふ、何人をもとして除外例なく何人をも、と。』(眠られぬ夜、九月一日。)——この慰め多き信仰はゲーテの美しき詩『神と舞妓(印度の)』(Der Gott und die Bajadere)の根本思想であり且つ同じ確信を以て表白されてゐる。

„Es freut sich die Gottheit der reinen Sünder;

Unsterbliche heben verlorene Kinder

Mit feurigen Armen zum Himmel empor.“

『神は悔改むる罪人を悦び給ふ。

不死者は失はれたる子等を

御腕もて焔の中より天へ引上げ給ふ。』

この語を發した口は恐らく、ヒルティの嘗て呼んだ程に『不敬虔』ではなかつたであらう！——

神は萬人を彼の國のための仕事に召し給ふ、しかも彼の國とは、神をば唯一の支配者と仰げる人間の魂内に於ける内面的王國である。それは外面的生活とは何等直接の交渉が無いけれども、『魂の不斷の根本氣分である以上、勿論また一切の外面的なるものにも』影響を及ぼし、『最早それをば全然この世の、従つてまた無常の世界秩序(それには無條件的にあらゆる教會的組織も亦屬するところの)の法則並に觀念に委し去るが如きことはない。……各個人にとつての唯一の重要事は、彼が實際に……この内面的なる神の國の内在るか、もしくははその外に在るかである。この國には、教會若しくは政治上非常に信仰を異にせる人々も、否、基督教に歸屬するとせざるとによつて毫も制限され又束縛されることなき神の忍耐と恩寵との下に在る非基督者すらも、屬し得るのである。』單に外面的に教會の掟を守るの意と基督教とは頗る一致し難いものである——これは、何れの時代にも、單に基督の教會に屬せざりしのみならず、更にその全生活及び行爲に於て徹頭徹尾眞の基督教の反對者にし

て、また神の誠命の蔑視者たることを證示したる、熱心なる外面的教會の歸依者が在つた事實に徴すれば明かである。——『全然基督の欲した通りの状態には彼の教會は未だ曾て在つたことが無い、——其初代に於ても亦、教會は猶これからその域に進むことを要し、且つ今や再び近づきつゝある宗教改革の時代も亦その爲に働いてゐるのである。』——この新時代が實現せんと努めてゐる理想は即ち『宗教に關する現時のあらゆる饒舌の背後に隠れ居るも、信仰の眼には映ずるところの未來の教會である。が、しかしその發端は、總ての眞に偉大なるものに於けるが如くに、小規模のものであり且つ最初は餘り多く世間の噂にも上らないであらう。』その第一に着手すべき改革事業は『教會開祖(基督)の思想をば——それに附着せる後代の追加を悉く一掃して——出來得る限り純粹に再興するといふこと』であらう。——未來の教會を早くも今日に於て如何にか『組織しよう』(organisieren)との試には、總て『疑もなく何等か尙早』と評さるべき點があらう。(新書簡集、『一層熱烈なる基督教』二

八三、四、二八六、二八〇頁。)精神的には既にこの未來の教會に屬せる個々人、即ちかの來るべき時代の先驅者は、ただ極めて僅少の人にしか知られてゐない。なほ其他にも亦、何人にも知らるゝところなく、靜かに世を隔て、己が名聲の世に揚らざるを憂へずして、その任務に勤める神の國の活動的的市民が幾多在るかも知れな

501

## 二

世に教會と呼ぶるところの組織につき、又それに對する彼の態度については、ヒルティは屢々語つてゐる、——しかも私の觀る所では『一層熱烈なる基督教』(Hilfensiveres Christentum)と題する思想に富める一文(新書簡集一七三—二八六頁)に於て最も明瞭に、——ヒルティは一見さう思はれさうであるが、その實教會の反對

者ではない、——加之羅馬教會に對しては彼は幾多の點において、彼自ら屬したる新  
教教會に對するよりも更に以上の同情をさへ示してゐる。ヒルティの主張するこ  
ころは、而も孰れの宗旨に屬する最も嚴格なる正統派の僧侶と雖も否定してはなら  
ないであらう所のものは——二千年に亙る基督教の歴史に於て——未だ曾て基督  
の教會の理想を實現したる教會若しくは宗教的團體が無かつたといふ一事に過ぎな  
い。『貴君は誤つて居られる、否寧ろ貴君は貴君の先生の謬見を受繼がれたに過ぎな  
い。』とヒルティは彼がその書簡、『一層熱烈なる基督教』を宛てたる一牧師候補  
者に書き送つてゐる。『私は教會に對して何等の反感をも抱いてゐない、否私は之に  
反して、それをば弱き者や、信仰の動搖せる者やを確乎たらしめ、初心者を教育し、  
多くの人を慰藉したり鼓舞したりする手段として、また總じて文明の補助手段とし  
て（しかも之と同等の價值を有して之に代へ得べきものは他に一つも無いのである  
が）非常に深く尊重してゐる者である。然しながら曾て可成り長い歳月に亙つて、

基督の欲したやうな『地上に於ける神の國』を實現した教會、若しくは宗派が存在  
したといふこと、この事は古來の教會史の示さぬところである、——それは、我等が  
自然の傾向として理想的に見ようとするとその原始時代に於てすら猶ほ認められな  
い。また是等の極初代の教團の缺點をも明瞭に看取しない者は、初代教會に關する  
最も古き且つ最も確實なる證據たる、コリント人及びガラテヤ人に宛てた使徒パウ  
ロの書簡を知るところ尠き者と言はなければならぬであらう。また爾來今日に至  
るまでの教會史は、總じて歴史の繙讀に於て最も深く人の心を痛ましむるものであ  
る。それは最も世俗的なる歴史にも劣らぬ程に、過誤や、憎惡や、鬭争やに充ちてゐ  
る。——否、かくの如きは神の國ではない。神の國とは全然内面的なる、正直なる且  
つ全然眞實なる、しかも亦極めて驚歎すべく又奇蹟に富める、個々の魂の神及び基  
督に對する關係である。さうして類似のことを體驗したる、空間及び時間のあらゆる  
制限を超越せる、同類の魂の團體こそは、これ實に基督が彼の教會なる語の下に

解したる且つ眞に彼に屬するところの團體である。これは順境に於ては、一時、外的の形を採り、一種の團體、もしくは教會的組合、若しくは私的組合として現れるともあらう、例へばワルドゥス派 (Waldenser) やカミザール派 (Kamistardener) やクロムウルの率ゐた清教徒や、所謂ウルテンベルグの諸宗派と同胞教團 (Brüdergemeinde) の個々の部分や、若しくは阿弗利加に於けるブーア人教團やの場合の如きである。が、しかしかくの如きものを何時までも持續するやうに組織することは出来ない。羅馬教會も宗教改革者等もそれを試みたが、徒勞に歸した、— 彼等の事業はただ部分的に若しくは一時的に成功したに過ぎない。それを今また同じ仕方を以て新たに試みさうして別の教會若しくは宗派を起さうとするやうなことも亦徒爾である、肝要なのはむしろ現存せるものに活氣を與へさうして新しき精神的果實を以てこれを充すとである。』(新書簡集二〇一—二〇二頁。) ヒルティは更に續けて書いてゐる、

『貴君の將來の行路のために次の一事を確つかりと感銘せられよ。凡そ教會なるも

のは極めて善き、しかも人間的なる、即ち獨り地上生活の爲としてのみ定められたる、無過誤ならざる』團體であるといふことを。教會は『不斷に火焰の試鍊に堪へ』なければならぬ、その信仰箇條に従つてゐなく、否、更に進んでは、單に良き意志にのみ従つてゐなく、寧ろ獨り『その果實』、その効果に従つてのみ、それがまた實際的精神を體してゐるかを判断されなければならぬ。基督の精神と心根とを示すことの出來ぬものは彼のものではない、また縱令それが千年に亙る組織の上に立ち且つ全世界の崇敬を受けてゐようとも。— 然しながら我等は、あらゆる人間的なるものに對する如く、今日存在せる總ての教會の不完全に對しても忍耐するところがないければならぬ、ましてそれは兎に角評判よりは好いのであるから。『少く共教會が神への途を離れぬ間は、これと別れるな、否寧ろ— それに對して(眞の意味に於て!) 使命を有する者は— 何等かそれに改善すべき點があるならば、自ら進んで協力せよ。』— 『貴君は貴君の將來の聖職を果すにこの方針を以て進まれよ。貴君は

この精神的方向に従つて、全然基督の基督教に専心歸依し、一切の他事に對しては比較的無頓着の態度を持しつゝ、人々を教育すべく努められよ。かくしてそれが若し單に極めて少數の人々——後年地上に於ける貴君の事業を繼承するところの人々——に於て成功するに過ぎずとしても、しかも貴君はなほ「敬虔にして忠實なる神の僕」であつたとの評價を受けられるであらう。然るに貴君にして若し之に反して或る新しき、例の如く單に半眞實の（即ち半眞實の原理に基づける）教團を創立したり、もしくは猶ほ生命ある他の教團を滅ぼしたり、若しくは幾百の教會を建立し、幾千の光彩ある説教や講演をしたり、數萬の異教徒を導いて單に表面的なる、多辯なる基督教に改宗せしめたりしたとするも、貴君の判斷（即ち世人の貴君に對する判斷）は多分次の如きものであらう——彼は、多少の事は成した、が然しそれは多くはない、また果實よりも寧ろ多くの葉と花とを産した、縱令樹の根や種類は好かつた、且つ樹はまだ單に伐り倒してしまふより外役に立たぬといふ程ではなかつたけれども」

と。——かくの如きガイストリクヘン牧師（又は僧、聖職者等）は、——ヒルティーはこの書簡（第八）をかう結んでゐる——『神の忍耐の下に、進級せしめられずして、なほ幾分長く同じ學級に止まるのである。』——

（一）開祖を Petrus Waldus とすひ、十二世紀頃フランスに起り、寂靜と道德的嚴肅とを旨とすたる宗派。

（二）十八世紀の初頃蜂起したるセヴェンヌ在住のカルヴィン教黨。

教會は、人間をして神を想起せしめ、彼をば神の傍に、神に關する思念のうち生活せしむることと又、たとひ唯だ一時的であるにせよ、單に動物的なる、所謂自然的生存から引き離すことに奉仕するものである。崇高なる目的に對する單なる手段に過ぎざる教會は、一たび此事を忘却しうして自らを自己目的と觀るに至るや否や、平板に、外面的に且つ機械的に墮するの危険に曝露されてゐる。さうなれば教會は、最善且つ最高のものを希求する、猶また、（彼等の教會の代表者等にして若しヒルティーが一種の『天才的創造』（eine „geniale Schöpfung“）と呼べる基督教をば

『その精神に適合する』仕方を以て述べたり、教へたり且つ説明したりしたならば、實際それ（その最善、最高のもの）を成就し得たであらう如き丁度さういふ人々をして厭ひ去らしむるに至るのである。

基督教の教説に於けるこの天才なるものをば再び世に示し、萬人をして再びこれを感知し且つ認識せしめ、それをば何人に對しても明白にすること、しかしそれと同時に『最も卑賤なる俗人も神及び我らの主と直接の接觸を保ち得る』程に單純に且つ易解に説明するといふこと——これ實に教會の任務であり、また僧侶（ゴーストは選ばれたる者）なる者の存在理由である。羅馬教會における監督並に法王制度の根本思想もまた茲に在る。——凡そ説教なるものには、總じて牧師の全活動と同じく、人間に最初の宗教的刺戟を與へ、彼を動かして我等に向つて差出されたる神の手を握らせるやうにするより外には何等の目的も存しない。『それ（説教）が若しこの事をしないならば、それと及びそれに関連せる「禮拜式」の全體は寸毫の價值もなく、寧ろ單

なる、多かれ少かれ美しい饒舌に過ぎず、容易に一層好きものによつて置き換へられ得るものとなる。——説教が良いと言へるのは、それが單純なる詞を以て、華麗なる修辭を用ゐず、聽者に對して何等か『眞實なるもの』を提供しさうして彼の衷に、『説教者の背後には或る威力（Macht）が立つてゐて、彼を通じて語つてゐるのである。』この學者の語るところは違ふ』との感じを起さしめるとき、唯その時のみである。『この威力は墮落し腐敗せる人々をも動かす、然るに人間的なる（單なる）倫理學は可成り善良なる人間を豫想して居るもので、失はれたる者を救ふことは決して無いであらう。』（新書簡集、一九五頁。）アッシジの聖フランシスは茲にヒルティの描ける如き説教家であつたに違ない。彼の詞や命令は動物に至るまで、——彼は彼等を、野獸をすら『兄弟』と呼びかけてゐた——、これを了解し、之に服従したのである。——しかし最も完全なる僧や説教家といへども、神への途上において我等の要するところの一切を與へることは出来ない——なほ欲如せるもの、『爾餘のものは人間自ら自

身並に神と共に解決しなければならぬ、教會に歸屬せることも決して彼にこの勞を省いてはくれない。』(同上、一九五頁。)

基督教の天才的なる所以は、その單純なる點、否寧ろ自明とも謂ふべき點に在る。基督教はただ一つの誠命を掲げてゐるに過ぎない、が、しかし之はあらゆる神的並に人間的なる倫理上の誠命をば除外例なく包容し且つ、若しそれが一切の人間によつて、一切の國民と階級と宗派とによつて遂行されさうして實際生活の唯一の原理となされたならば、獨り全くそのみで、如何なる宗教も如何なる教會も、如何なる立法も、哲學若しくは倫理學も今日に至るまで未だ曾て成就し得なかつた所のものを、——即ちあらゆる宗教的、政治的、社會的及び教育的『問題』の決定的解決を齎すの業を成就するであらう。その誠命とは、『あらゆる人間を、——否恐らく基督教は總じて一切の生ある者を意味してゐるのであらう、——汝自らの如く愛せよ』である。それは即ち既に讀者諸君の知れる、かの子供らしき『ヨハネの遺言』、『子等

よ、互に相愛せよ』である。——

如何なる宗教も、基督教の如くに愛(Caritas 仁、慈悲)を引上げてその原理(根本主義)となしさうして一切の人間行爲の唯一の眞誠なる、道徳法と神慮とに適へる動機であると宣したものは無い。基督教的愛は奇蹟的力であつて、『生れながらの利己主義を全然克服し』、新らしき人間を、従つて亦新らしき世界を創造し、(自分免許のではなく、寧ろ)眞誠の意味に於ける『あらゆる價値の倒換』を、さうして地上に仕める萬人に對して同じ幸福を齎すことの出来るのは獨りこれ在るのみである。

愛はよく是等一切のことを成し遂げる、蓋しそれは神の精神其者だからである。愛を持てる者は神の傍に生き、神の恩寵に浴する。『その人は安全である。彼には最早たゞ善効あるもの及び幸福を齎すもの以外には何ものも起り來るを得ない。愛を知らざる者、もしくは何等かさういふ風なものゝ存在をすら知らぬ者は、到底完全なる幸福に達することは出来ない、たとひ彼にして最高の玉座に即いてゐようと

も、もしくは其他、世間の幸福と呼ぶところの一切を所有してゐようとも。かゝる人は人生に於ける最上のものを知ることもなくして生涯を送るのである。——恩寵なるものは理知を以てしては之を了解することも、説明することも又認識することも出来ない。『それに浴してゐる者は、——たとひ初期の僅少なる程度に於てなりとも、

——この間の消息を知つてゐる筈である。何故ならばそれは他の如何なる幸福の感じとも違つた一種の感情だからである。またそれは他人に向つて説述することも出来ない、畢竟それには詞による表現の途が缺けてゐるのである。——私はこれ無くしては一日も此世に生きてゐたくないと思ふ——とヒルティは結んでゐる——、静止、否、永久的壞滅の静止すらも私にはそれよりも遙に好ましい、この點において私は最もひどい厭世主義者に同意する。しかしながら恩寵に浴してゐるとき、人生が必然に伴ひ來るところの一切の困難にも拘らず、それ(人生)をば一種の幸福として感じないといふことは全く不可能である。』(新書簡集、一九三、四頁。)

愛とその最も明瞭なる表現たる眞誠の親切とは世を克服するところの力である——それは世を獲<sup>グライネン</sup>得する、さうして同時にわれ等を世から獨立せしめる。『親切に對しては最も微賤なる者も、小さき動物すらも到底欺き難き感じとそれに従はんとする一種の自然的傾向とを持つてゐる。』(新書簡集二二三頁。)——神の恩寵の下に在るのは、『權勢家や、富者や又怜悯なる者よりも、寧ろ却つて貧しき者や、疲れたる者や又虐げられたる者がこれに對して強き信頼を感じる』如き人であることは可成り確實と見て差支ない。これらの『小さき者』は滅多に欺かれない、それは善良なる性質を有せる、教育によつて損はれざる小兒、もしくは動物が欺かれることの少いのと一般である。『されば如何なる文藝院の力も教團會議の力も或る人の人間としての聲望を久しきに互つて維持することは出来ない、それを爲すものは寧ろ單純なる、多く虐げられたる民衆の立證である。二千年以來基督教を維持し來つたものも亦これである(この事に人間の力が問題となつた限りに於ては)。諸々の教會や、



又は政府や、又は神學科及び哲學科のみの力によつて之を能くすることは蓋し覺束なかつたであらう。』(新書簡集、二二四頁。)

愛は自由にし、悦ばしくし且つ恐怖無くする、蓋しそれは我等の眼及び感官をば世界及び人生に於ける眞に善きものと貴きものに對して開き且つ鋭くし、さうして我等に、萬人から追求され、非常に稱揚さるゝ幸福の財寶の全然虚妄に過ぎざる所以を示してくれ、その結果我等はもはやそれらを欲求するの念を失ひ、従つて亦もはやそれ等とその所有者及び消費者との支配下に在り得ざるに至るからである。この愛に充ちたる魂の中には厭世主義を容るべき餘地はもはや少しも無い。——「私は生涯の中に人間蔑視者となつたかも知れないやうな時が屢々あつた」——とヒルティは言つてゐる、而も私自身の經驗は彼の詞の眞實を確證するのである——「然るに私がさうならなかつたのは、兎に角社會の上流階級との交際のお蔭ではなく、寧ろ之に反して小さき人々の生活と考方とに對する洞見に基づくのである。——世の

中の小さきものに對する眼と特別の愛好——とを持つやうになるや否や、現代の疾患たる厭世主義に陥るの虞は永久に無くなる。これに反して胸中になほ地位高き者、高貴なるもの(即ち『世間』がさう呼んでゐるものであつて、ヒルティがその『高貴なる心霊』(Vornehme Seelen)に關する章に於て論じてゐるところの眞誠の高貴なる——即ち氣高きものではない)もしくは外見上目に立つものを好む一種の傾向の(たとひそれが單に隠れたる傾向であつても)存する限り(これは今日の教養ある及び好い加減の教養ある階級に於ける殆ど除外例なき事實であるが)、此世の君主」はなほ依然としてその名義を保持するの權利を失はず、確乎たる幸福を獲得するとは出來ないのである。更に附言さるべきは、苟も我等にしてその爲に盡さんとの意志さへあるならば、小さき者は通例(地位高き者よりも)遙に興味あり且つ愛すべき所のあるものだといふ事である。その巢に於て觀られたる蟻や、勤勉なる小蜜蜂や、又は鶯は、獅子や、鷲や、更に進んでは鯨などよりも遙に注目すべき且つ人

の心を惹くに足る動物である。また小さきアルプスの小花は華麗なる鬱金香やあらゆる流行の簇葉植物よりも遙に美しい。世の中の小さきものに注意を拂へ、これ人生を一層豊富にし且つ満足にする所以である。』(眠られぬ夜、十一月十七日。)

『小さき者』に對する愛のうちに、また『小さき者』即ち卑しき者や、貧しき者や、僕婢や、子供や及び動物が或る人に對して抱くところの信頼と愛著とのうちに、ヒルティーはその人の親切に對する最も好き徴證を看取してゐる。『子供や動物の本能的に好まぬやうな人には信用が置けない。婦人もまた好き價値尺度である。尤もそれには彼等自ら良き種類に屬するものなることを前提する、然らざる場合にはその意味は正に反對となる。』(幸福、第二卷、九六頁。)

しかし資性の一般に善良なることのみならず、更に亦その人の眞の教養と、眞の氣高さも、小さき者、屈服せしめられたる者及び弱き者に對するその態度から誠認せられる。ヒルティーは『自分よりも目下の者、又は貧しき者との應對に於ける高慢』を評して『不完全な

る教養の充分な徴證』と言つてゐる。これは疑もなく正しい、が唯だ私はこの『不完全なる教養』といふ軟弱な詞の代りに——これ畢竟單なる缺如(Privation)の意味を表示するに過ぎない——この場合いま一層強き詞を用ゐて、この高慢をば積極的に呼んで、心根の野卑(Gemeinheit)下劣(Niederträchtigkeit)と言ひたし、蓋しそれは、ヒルティーの言へる如く、『目上の者又は富める者に對する屈從を伴ふものだからである。これ實に教養なき社會から生れたる』且つ私の眼には、最も賤劣なる種類の人間に屬するところの『成上り者の本來の徴證である。』『徹頭徹尾典雅な教養のある者』(ein ganz fein gebildeter Mensch)は——我等は寧ろ(しかも之はヒルティーもまた意味する所であるが)、徹頭徹尾氣高き人(ein ganz vornehmer Mensch)もしくは、(全く同じ事であるが)眞誠の基督者は、と言ひたい、——『常に懇慫にして懇切であるだらう、が、しかしその度は、その接する者が彼の目下の者や、彼に依頼するところある者、もしくは虐げられたる者であればある程、いよ／＼高く

なり、又その接する者から特別の尊敬を要求する風があつたり、又は彼其人を鼻であしらふやうなことをすればする程、益々低くなるであらう、鄭重の限界に達するまでは。』（同上二五九—一六〇頁。）

一切の貧しき者及び小さき者に對し、動物及び植物に對して、懇切と、親切と及び愛情を持つやうにとは、これヒルティの我等に向つて極めて屢々勸奨してゐるところである。而もそれは冷やかなる理論家や空理家としてとばない。想ふに彼がそれを説くは、誤認し難き、眞に衷心よりの親切と自身の經驗とに促された爲である。愛の缺乏が下位に立てる人々及び『無言の被造者』をして如何に多くの苦惱を嘗めしめてゐるかといふこと（これは彼等も亦神に向つて叫び訴へてゐる所であるが）、この事を『一切が總勘定される日』に始めて動物並に人間の虐待者は經驗するであらう。』（力の秘密六六頁。）『努めて、小さき人々に親しめよ、平素は汝が毎日冷淡にその傍を通り過ぎてゐるところの郵便配達人や、街路掃除人や、ランプ點燈者や其他

多くの人達に。それは通例たゞ取るを知つて、寸毫も與ふるを欲せざる最上流社會との交際よりも汝にとつて遙に好き報を齎すであらう。』小さき者に對する懇切は『彼等の虐げられたる生活に於ける太陽の光線となることが出来る。汝にして若し控目にしたいとの要求を感じずるが如きことあらば、それは常に上に向つてし、決して下に向つてしてはならぬ。——更にまた動物や植物をも汝の溫情に浴せしめよ。』『これは私の親しく經驗して知つてゐる所であるが、我等は隣家の犬や猫とも好き知合となり極めて楽しい氣持を以て交はることが出来るのである。』（同上八九、八三頁。書簡集三三、三四頁參照。）——

同じ思想は、恐らくなほ一層力強き詞を以て、『良習慣』（幸福第一卷）の條及び（公正か同情か）（新書簡集）なる論文に於て、また其他ヒルティの殆ど何れの著書に於ても述べられて居る。

「習慣は第二の天性となる」とは諺にも言ふところである。この眞理を愛に適用せ

よ、さうして「如何なる代價を拂つても且つ汝自身のために」先づ兎に角汝を愛といふことに慣らすやうに試みよ。人間やまた其他の者が果して汝の愛を受くるに價するかしないか、それは汝の懸念してはならないことである。のみならず之を常に正しく決定するは餘りに困難な事であらう。猶それにも拘らず、萬人に對して同様に懇切にすることが汝に不可能であるならば、「よし、然らば最初は安んじて區別を立てるが好い、しかし常に必ず此世の小さき者、貧しき者、簡素なる者、教養なき者、小兒(動物や植物に至るまで)等を先にし、決してこれと反對に上流の人々を先にしてはならない。その結果汝は幸福であらう、しかも汝にして汝の「卑下」に對して感謝を期待せず、むしろ彼等の愛をば汝のと同様に高く評價するならば、特に——就中著しく冷やかなる溫度(態度)の最も能く相當するは、先づ第一に、人をし(自分に對し)畏敬の念を起さしめんと欲するが如き人々に對する場合、或はまた數多き開化せる食人者(zivilisierter Menschenfresser) 此蓋し至言と謂ふべきであ

る!)の階級に對する場合である。是等の食人者は皆人々と「相識になる」ことを欲するも、それは畢竟、彼等の好奇心が一たび満足され且つ恐らくはまた彼等の虚榮心が満足されざることを感ずるや否や、その人々を再び見棄てんが爲に過ぎない。最後には上流社會の人士や、富者や又——「淑女」に對しては冷やかな態度が相當してゐる。是等三つの人間階級は常に、彼等に對して人の示すところの懇切を、悪い方へ)誤り解釋せんとする傾向を持つてゐるのである。』(幸福第一卷、一二七、一三二頁。)

## 三

加特力教に對してヒルティは多大の理解と同情とを持つてゐる。加特力教の新教に勝るところ又その強みと牽引力との潜んでゐるところは、特に愛や、自然な懇

切及び快活やの一層大なる所有と、神的世界秩序に關する一層確乎たる、疑の接近すべき餘地の一層少き信念とである。少しくより多くこの愛と平和と快活との精神を新教に注入することは重大なる任務であらう——主として僧侶や宣教師にとつては。しかし彼等のうちの多くの功名心強き夢想家達にはこれは餘りに些細で、あまりに單純なのである。彼等は直ちに『一般的で大規模な』活動を爲ようとし、やつと學校を出るや出ないに、もう地上に『神の國家』を建てようとする。彼等は己が力を検査せず、また總じて、基督自身も（マタイ二三、二四—三〇）『神の國家』(our King's Dei) なる考を明白に斥けたことを忘れてゐる。最後の『收穫』以前には惡は強ひて善から離すべきでも又離し得べきでもない。家庭のやうな最も小さい社會に於てすら、善き者は『三斗の粉の中の酵母』に過ぎない、されば全世界を眞實の意味において基督教化することは如何なる改革者にも成功しないであらう。『もしそれ（世界）が其中にある基督者によつてより善くなるならば』、我等はそれを以て満足しな

ければならない、ところがそれはさうなつたのである。尤も時々はまだ一層大なる急動が、「前進」が来る、而も我等は今また其前に立つてゐるのである。當分——今生きてゐる我等にとつて——肝腎なのは、基督と個人的に眞誠な、内面的な關係を持つやうになり、従つて彼を全然理解しさうして全然彼の考方と風との中に這入つてしまふといふことである。もう一つの事は、大規模の活動（従つて影響）は、何時かまたかゝる人々が充分多く出るとき、又それに對して時が「充ち」たとき、その時に來る。而もいつ時が「充つる」かは我等自身の全然判断し得ざるところである。——擅に確乎たる、しかし寂靜にして徐々たる歴史の進行に干涉せんとする、また『社會主義の（若しくは協會や宗派の遊戯の）途を採つて』その功名心の夢を實現せんとする、『誘惑』に對してヒルティはその若き牧師候補者を誡めてゐる。——『協會を起したり、到る處に講演を試みたり、また國際的に全世界と關係を結んだりすることは、それに對する『疑ふべからざる命令（上よりの召命）』を『缺く』ならば、一

種の虚榮的にして神に厭はしき活動である。『貴君は唯、獨り自分だけで全く本當の人間且つ基督者となるやうに日毎に努め給へ。さうすれば主は求めずして貴君に活動の機會を與へ給ふのである、而も貴君自ら考へ且つ想像するよりも遙か以上にすら。凡そ光は屹度輝くものである、それを猶特に命ずる必要はない、またそれが光力を發展させ得る暗黒は充分に存在してゐる。かくの如き現象に向つては人々は何時ウエストエーレンドも文字通りに突進するものである。宗教的のことに對する感受性や世界慘苦の深い感じは少しも缺けてはゐない、脱出すべき途が缺けてゐる（換言すれば人々はこの途を見ない）のである。それを見たならば、世間は、その當時洗禮者ヨハネと基督とにしたやうに、群を成して潮の如く押寄せるであらう、而も恐らくその結果も同様にして、その意味するパンを得なかつたならば、彼等もまた再び群を成して背き去るであらう。』——『僧職に必要とせらるゝところは多い、それで現今、まだ少しも醗酵しきつてゐないやうな極めて年若き人達をば一壇下全體の獨立した説教家且

つ心靈監督者 (Seelsorger) とすると云ふこと、この事は現に我等の目睹する通りの結果を齎した。その最良者は、少くとも一時は、ロスマルスホルムの牧師「イアセン」の戯曲『ロスマルスホルム』となる、また幾多の者に於ては、彼等の聖職は、それに對する「召命」(Berufung) なくして、外的理由から彼等自ら選んだものだといふことが明かに認められさへするのである。——現今我等がこの爲に要するは、悦べる基督者、即ちその自ら確乎たる信仰のうちに幸福であり満足してゐること、及び彼等を引上げてあらゆる困難と逆運とを超越せしめ得る、さうして亦他の人々にも傳へることの出来るところの、別世界の力を持つてゐること、人が感知されるやうな人々である。——この外の聖「職」は我等の時代に對してはもはや何等の意味も目的も無いものであつて、むしろ唯、特に教養ある者が基督教に接近することを——彼等は他の點に於ては今や一時代前よりも一層これに傾いて來てゐるのであるが——妨げるだけである、——現今この點に於て彼等を妨げてゐるものは、基督教的精神を有する人々

の側に於ける信仰の不足ではなく、**所有の不足**である。』(一層熱烈なる基督教、第十五、結尾。)

また加特力教は今日も猶ほ丁度この後の方の不足に悩むことが新教世界よりも遙に少い。基督教の大いなる實は愛である。加特力教は一層愛深くある、それ故に一層愛すべく (Liebenswerter) またその所屬者から新教よりも遙かに多く且つ衷心から愛されてゐる。新教は慥にその所屬者の中から加特力教よりも多くの有徳なやうな、謹直なやうな、尊敬に價するやうな人達 (Tugend same, sittsame, ehrsame Leute) を擧げ得るかも知れない。けれどもこの如何はしき附物(即ち「やうな」)は私にとつては冷やかなことや、なまけも情味も無きこと (Herz- und Gemüthlosigkeit) や、固苦しきことや、外面的なことや、自己満足や、バリサイ主義などの響を持つて居る! それはまた善き性質を歪めるものとするのみならず、更に容易にその反對に變へることすらある。『愛を缺くこと多ければ、有徳の人々も煩はしくなり

易い。或種の方正なる、しかしその最奥の心底に於ては全く愛を缺ける性質が――一部の新教(特にカルヴァン派)社會に固有なる如き性質が――殊に年若き人達の胸に苦々しい思を起させることの如何に甚しいかといふとは、(その結果彼等は屢々、是等の冷やかなる君子然とした人達とよりも、寧ろ極悪漢と共に在らんことを願ふやうになるのであるが)、實に言語を絶するところである。『愛は常に心を悦ばしめる眺である、たゞ小さい子供がその小猫や、小鳥や又は小兎や、加之單にその木製人形を優しげに護つてゐるのを見てさへ、人はそれが自己教育といふ人間にふさはしき行だとの感じを起す。之に反して諸學校に行はれてゐる、名譽心獎勵の組織は、青年を驅つて、遂に賤しむべき出世主義者となり完全なる利己主義者となるには、たゞ實生活に於て進んでそれを追究すれば足りるやうな徑路に導くのである。』この故に基督も『愛の退化』と呼ばれ得るやうな『種類の罪惡』に對しては『著しく寛大』であり、バリサイ人の如き冷やかな道學先生に對しては極めて拒斥的態度を取

つてゐる。「我等はこの點に於ても亦彼に倣ふを好しとする。」「愛なければ世界は、あらゆる自然美や、藝術や又學問を以てするも、ただ極めて憫むべく且つ不満足なるものに過ぎない、さうしてよりクリニク惻巧で「即ち恐らくよりロイヤル賢明との意であらう」人々があればある程、より多くそれを感じ、より早く看取する。たゞ愚か者等がなほ暫く嬉しげにこの人生の享樂の綠の草原の上を駆け廻つてゐるだけである、彼等が其處の主人公である間、——も一つの種類の愚か者等は、神に對する愛を持たなくとも、人は人々を、もしくは少くとも個々の人間を「永久に」愛しさうして其中にその生涯の幸福を見出し得ると信じてゐる。が、それは兎に角比較的高貴なる者の過誤であつて、その低級の形に於てすら、赦を得ることの一層容易なものである。ルカ七、四七。」(眠られぬ夜、第二卷、十月十五日、三月二十日、八月三十一日。)

我等は加特力教において、下は最も小さき者や最も貧しき者から、最も下級なる且つ求むるところ最も少き修道士又は教會奉事者から、上は法王や、聖人達や又最

も崇高なる者と最も光輝ある者に——聖母と、基督と、神とに至るまで、一つの全き『愛の階段』の存するのを見る。加特力教徒は『その教會を、教會の外的建物をすら愛する。そこでは極貧の女も公民ハイマートレヒト權を有し、日毎の彌撒に於て少くとも少時の間その家庭の苦惱から脱れてもつと美しい世界に移されるのである。之に反して多くは可成り貧相なカハル(のみならず唯だ日曜日に二時間だけしか開かれてゐない)建物は我等(新教徒)にとつて何の意義を持つてゐるか。』然るに愛は加特力教會の戸を常に開いたまゝにして置く。『そのより善き生が破壊され、散々に碎かれ又は動搖するに至つた時、惱める魂はその需要に従つて、人目に立つこともなく、暫くの間一日中のどの時間にも其内に遁れさうして嚴かなる寂靜のうちに在つて感じ得るほど永遠者に近づき、再び自らerhalten。』この語の固有の意味においてする即ち起き上がることが出来る……また加特力教の禮拜に於て一層美しいのは、自由に這入つたり出たりするのを許すこと、又説教がそれ程までに唯一の主要事でないこと



— 従つて(即ち唯一の主要事となつてゐるが爲に)また(新教徒の側に於ては)通例  
餘りに長く續き過ぎる譯でもあるが——とである。『説教や祈禱をもつと短く、解り  
易くすることや、好き音楽を入れることや、常に戸を開放して置くことや、また聖餐  
を受け得る機会を遙に多くすることや、是等の事は餘りに冷靜にして理知的なる新  
教の禮拜式をば多くの人々にとつてもつと心を惹くものとするであらう。(新書簡集  
二四七、八頁 二四四頁以下。幸福第一卷一三〇、一三一頁。第二卷四一頁註二。)  
愛と信仰との一層大なる貯蓄たくはへは加特力教をば今日の新教よりも一層親しみある  
ものとし、柔和にするのみならず、概観すれば、また一層自由にして落著さあるも  
のとし、此世の『偶像』に降服すること一層少く、時代精神の接近し來るのを一層  
少くする、— 我等は言はう、それ程に『近代的』でない、と。これがために全然加特  
力教的な地方は『弛緩アファクシユメントせる人々に落著さを與へるやうな或ものを持つてゐる。其處で  
は人は絶えざる仕事の躁急(Arbeitsheize)や、「驅使者の棒」を見ずして、民衆の最

も微賤なる者にとつてすら、なほ單なる仕事の成績の上に位せる生活の在るのが見  
られるのである。これはまた加特力教會の今日持てる牽引力の一部を成すものであ  
るが、しかし煽動アドボカティオンを始めるやうになれば、この力も失はれるであらう。(幸福  
第一卷、一五三頁註。)—

その本質並に制度の上に於て、他の諸宗派の僧侶よりも遙に僧侶の理想に近いと  
ころの加特力僧侶から、新教徒は多くを學び且つ採用すべき筈であつた。

ヒルテールは眞誠の僧侶の尊嚴と、意義と及び任務とについては極めて崇高なる  
觀念を持つてゐる。彼が僧侶に要求するところは實は聖(Heiligkeit)以下のものでは  
ない。教會において最高の地位を占むる者から慈悲深き尼達に至るまで、凡そ僧  
職に在る者を批判するに當つて、彼の本質的として重視せるは、彼等が少くとも、神  
が依つて以てその特選者等を拔群たらしむるところの偉大なる靈的天稟ガイブの幾分を具  
備するや否やである。それは即ち聖書に謂ふところの病の治癒や、豫言や、人を慰

藉することや其他の天稟である。是等の天稟の毫も認められぬ人の靈的指導には信頼するな、とヒルティは警告してゐる。それらは神學上の博識によつても、教會に對する熱心若しくは説教の才によつても代られ得ず、また如何にかしてそれを傳授するが如きはなほ遙に不可能にして、寧ろ『神の直接の信任であり、今日もなほ往時と同様に、又あらゆる教會的團體において可能なのである。』僧侶階級にしてそれ等を失ひ、従つてまた『人類に對してその正當の影響』を及ぼさなくなるならば、その責は彼等自身の上に在る。しかもこの事たる、僧侶がその職に對する單に事務的な態度によつて自ら辱め、もしくは現世的目的の追求によつてその精神的生活の高處から沈下するや否や直に起るのである。身は僧職に在りながら、現世的精神を懷き、無常なる興味に釣込まれた人は自分自身(即ち僧侶)の概念と矛盾した生活をしてゐる、のみならず更に、自らその師であり、指導者であり、幫助者であり又道德的模範であるべき筈の人々に對して不正を行ふ者である。あらゆる時代に於て又孰れ

の國民の間にも、自身並に現世に關する事は既に完了して居り、自分自身のためにはもはや何等の願望をも持たずして、ただ正しき仕方によつて他を幫助するためのみ存在する如き人々が可成り多く居るに相違ない。これこそ眞誠の「僧侶」(選ばれたる者)である、——彼にしても是等の性質を具へてゐないならば、彼には餘り價値が無い。汝若しそれら(上の諸性質)を具備するならば、王冠にもそれを換へるな。』(眠られぬ夜、一月十五日。)

ヒルティはその年若き牧師候補者にかう書き贈つてゐる。「肝腎な事は貴君が「生の享樂」に對して明確なる態度を取ることである。——僧侶はその社會上の地位の故に、ただ除外例的のみに、必しも到る處で上流階級に數へられてゐないが爲に、彼等はそれだけ大なる熱心を以て」賤しむべき出世主義によつて、即ち地位高き者や富裕なる者(その罪惡にも彼等は好意的に蓋をしようとするやうになるのであるが)との社交的連絡により、富者との結婚により、もしくはその子女をば所謂

「自由なる者の階級」に外らせることによつて、この如何はしき榮譽を贏ち得ようとする。この賤しむべき出世主義の結果の一は單に形式的なる教會主義 (Kirchlich-keit) であつて、これは今日『多くの人には基督教の代りとなり、更に進んでは實のところそれを理解し難きものとしてゐるのである。』之によつて僧侶は『貧しき人達の——彼等が乞食でも出世主義者でもない限り——心からの信頼を失ふ。私はかういふ虐げられたとして助言を求むる人を勸めてその滞在地の牧師に行かせようとした時、彼等は皆金持の細君を持つてゐる。だから貧乏人に對する情などは無い、との答を得たことを記憶してゐる。斯様な主張に誇張のあることは極めて見易い。けれども今日の民衆は往々さういふ風に考へてゐるのである。』——『完全にその師 (基督) の明かなる足跡を追ふことが出來ず、却つて現世と妥協せずにはゐられないうやうな』牧師となるといふ悲むべき運命を貴君が遁れ得る唯一の途は、總じて生の享樂を、『上品』なるものですら、人生の目的と見做すことを止めることである。

『將來の聖職において貴君は獨り誠の親切によつてのみ人の心を獲得することが出來る。決して他の方法によつてそれを試み給ふな。』既に述べたやうに、親切に對しては最も微賤なる生物も一種の欺き難き本能を持つてゐる。然るに何が誠の親切であるかは、一つの神祕であり且つ一つの大いなる神の恩寵の賜であつて、何人も自ら與ふることを得ざる、而もまた何れの人も功績によつて之に價する者とはなることの出來るものである。『それを持つ者は一種の藝術家であり、それを持たぬ者は高々善の王國に於ける助手たるに過ぎぬ。彼の仕事は最上の場合には有害でない、が、しかし彼は何物をも建設することはなからう。眞誠の、生ける基督の教會の礎石はすべて眞實の愛を以て置かれねばならない。さうしたならばそれは、あらゆる冷淡とあらゆる唯物主義とに拘らず、今日もなほ往時と同様に、出現するのである。』——『たゞ愛してゐる人々に對してのみ人はまた隱蔽するところなく眞實をも告げるところを許される、其他の場合には人はその勇氣を持たない、のみならず彼等も亦それ

を容認しない。また愛してゐない人々に對して人は怖れを懐く、獨り眞實の愛のみが世間から獨立せしめる。』（新簡書集二二一—二二三頁。眠られぬ夜、一月二十六日。）

これが——人間を自由にすることが——愛の最も大いなる、最も驚歎すべき業である。それは簡単に——總ての奇蹟の如く、屢々突如として——我等の胸中に眞實の愛の單に輝き昇ることによつて成就される。茲に於てか一切の不完全にして低級なる愛は消失し、さうして人間はその最も重苦しき鎖を脱する。——加特力僧侶は新教徒よりも聖職者と自由なる人間との理想に近い、さうして僧侶階級の獨身を命ずる掟は、他の宗派に對する羅馬教會の優越が——即ち不信者といへどもそれと接觸すれば容易に自分自身の上に經驗するその牽引力や、その全體の模範的な魁偉な組織や、その奉事者等の都雅や、愛想よきことや、柔和や、世話好きや又沒我心やが——説かれるとき、人の最後に想到するものでは慥にない。——ヒルティはその

牧師候補者に與へた書翰の中に言つてゐる。「私は自白する、今日の我等の牧師達も少し多くの眞に僧侶らしい感情と性質とを持つやうになるとは私には願はしからぬとではないといふ事と、及び私の觀るところでは獨身主義すら、我等の牧師候補者や宣教師候補者等が結婚に對して現すを常とせる、而もその點に於ては彼等の平素特に屢々引用する儀表パウロ（例へばコリント前書第八章）を少しも見倣はうとはしない所の顯著なる熱心に對照して、多くの根據を有するといふことを。我等（新教徒）の聖職者の間に獨身主義を實行する者が殆ど全く無いといふことは、私には常に一種の如何はしい徵證と見えようとした、他方に於てはそれを律法的に要求することの可否は極めて疑問であるといへ。人の知る如く基督はこれに關聯した箇處に於て言はれてゐる。「之を受け容れうる者は受け容るべし」と。しかしそれを受け容れる者の僅かしか無いといふことこそ、これ實にその如何はしき所以である。——「今來ねばならぬものは、教會組織の外的改革ではなくて、諸國民の内的更生であ

る。――再び獨逸民族を先頭としたる。それには慥に、それに萬事が懸り又それ無くしては何物も榮えざる、神の活かす力が必要なのである。が、しかし人間的に言へば、それは選ばれたる者（*Chosen* 即ち僧侶に外ならない）――神が再び或國に宿り得るやうになるのは是等の人達の衷に宿るからである――によつて成就されるのである。貴君は自らを、それに造り上げなければならぬ、さうしないならば貴君の神學は寸毫の價値も無い、また貴君が大學を出て實生活に入るに際して抱いてゐなければならぬのも亦之に對する確乎たる決心である。』また『現今最多數の青年神學者等が有するよりも遙に深き聖書の造詣』を持つて出るとを要する。ヒルティは現代の或る牧師がこの事の等閑視を歎じた次の如き『重みある』詞を引いてゐる、――之は單に神學生のみでなく、公の職を志す一切の青年學者にも當嵌る詞である。『大學を出るに際して學生の携へ行くべきものは決して單に學問といふやうなもののみではなく、神よりの生活と、悦ばしき信仰と愛の焔とである。――嗚呼、その三年の大學

生活の後、ただ講義の筆記を、消化されざる材料を――その一部分はまた、彼が問もなく心靈の糧としてその信徒に勧めることを聖所に於て誓はなければならぬものは反對の位置に立つものであるが――家に携へ歸る者の如何に數多くあることよ！多くの人には聖書は大學に於て初めて如何はしい書となつた、彼等はその汚點と缺陷とについては能く多くを語り得るのである、けれどもその妙なる點については知るところが極めて少い……活ける信仰と聖き愛との一閃光をだも持たずして、嗚呼！恐らくはパンの爲に、彼等自らの信ずるを得ざる且つ欲せざる詞を宣べ教ふべき職に就くやうな神學者等は――たとひ二つの學位試験に及第してゐても――如何に言ひやうなく憫むべき、如何に甚しく不幸な人達であらう！『彼等は、患者や臨終の寢床を見舞はなければならぬ身であつて而も少しも學習したことのない青年醫師達よりも更に遙にみじめなものである。』（新書簡集、二一八、九頁註三。）

詩篇の第九十に『われらが年をよる日は七十歳にすぎず、あるひは壯やかにして八十歳にいたらん、—またその貴かりし時にも、そはくるしみと勤勞とのみ、その去りゆくこと速かにしてわれらもまた飛去るが如し』とある。—ヒルティは少しくこの句の結尾の處を變へて、言つてゐる。「また縱令そはくるしみと勤勞なりしとするも、なほ貴かりしなり。—これ實に幸福なり」と。而もこの幸福は—人生は成るほど速かに飛去り (fliegt) はするが、しかし飛去つてしまひ (verfliegt) はしないとの確乎たる信念と結びつくとき—決して空想の所産ではなく、寧ろ達し得らるゝ且つ達すべき我等の本來の生活目標である。(幸福第一卷、二二〇頁以下。)

我等にしてこの『唯一の道理ある』目標に向つて努力しました、それに對して萬人

が召命を受けてゐて、又その成就には實に我等の幸福が懸つてゐるところの仕事に與からんと決心するとき、我等は我等の生活をいみじきものとする事が出来る。それは『不満と生存競争との代りに、地上における神の國を、平和と愛との國を、促進することである。ただ我等がそれに協力した限りに於てのみ、我等の生活は目的と價值とを持つ。而もそれには何人も、行動によつてか、もしくは受難によつて、協力することが出来るのである。』蓋し受難は人生に屬するもので、幸福と相容れざるものではなく。人がそのうちに、我等に向つて差出されたる神の手を看取するならば、それは、正しき人生觀を持つる者には、幸福の源泉とすらなり得るからである。『前には恐らく汝に幸福の可能が無かつたのであらう、しかし今は慥にある、—汝が凡そ生涯のうちに成就し得る最高のものは、今こそは實に汝の領域内に在る。』餘り人間に助力や仲介を請ふことを止めて、この神の手を握れ。『神が既に幫助したか、もしくは彼等にそれ(幫助)に對する指示と能力とを與ふるとき、そ

の時初めて人間は最も能く助けるものである、—それ以前には彼等は屢々、最も都合好く進行してゐる事柄をも毀損するに過ぎず、又、神を離れて爲した自己の撰擇と同様に有害なるものである。』

また本當の悦びといふものを知つてゐるのも實は、多くの苦難を嘗め來つた人々のみである。他の人々はただ『歡樂』(Vergnügen)を知るに過ぎない、ところがそれは悦びであるなどとは思ひも寄らず、大抵は苦難を伴ふものである。人は、苦難が幸福の『前觸れの使』<sup>プロオレポリア</sup>であり又いみじきものに對する『木戸錢』であり得ることを固く信ずべきである。また人は『享樂を追求するやうに教育された且つ苦難を厭ふことの極めて甚しい現代人が不斷の状態として持つことを望むやうに、全然如何なる苦難からも離れてゐることは、危険なる状態であるといふこと—經驗と歴史とがこれを教へてゐる—を知るべきである。また未だ嘗て本當の不幸といふものを經驗したことの無い人々は、……人間の心に自然なる高慢<sup>\*ホムヒト</sup>—これは突如として同

様に大なる落膽に逆轉し得るものであるが—をば唯だ稀有の場合に於てのみ脱する。—これ即ち既に古代人の觀るところに従ふも、神々の怒とその復讐慾とを喚び起したる、』さうしてヘラクレイトスが火事よりも早く消すやうにと命じてゐるところのかの Hybris <sup>[高慢といふ意の希臘語]</sup>である。人は亦『子供をも、苦難に對して怖れを抱かず、不幸の中の幸福に對して磐石の如き信仰を持つやうに』教育し、且つ『生の無雜なる悦びはこの世の何人にも與へられなかつた』といふ洞見を出来るだけ夙<sup>はや</sup>く教へ込むべきである。』ちやうど上にその一部を引用した同じ書翰『不幸に於ける幸福』に於てヒルティイは言ふ、『私にして私の生涯中の苦難を削除したとすれば、全然善きものは毫も記憶の中に残らないであらう。總てはかくの如き時に生長した、それで私は私の經驗の總和においてそれらの一つをも缺きたくない。それ故に私一個としては言はなければならぬ、私は是等の經驗をした爲に、(多くは將來の幸福を意味し且つ準備したところの)苦難の裡に在つては寧ろ希望を持つやうになり、

之に反して餘りに多くの幸福に對しては不信を抱くやうになつた、と。』(新書簡集、六〇、六一頁、五七頁註。眠られぬ夜、一月三日。)

苦難のうちに在る不可思議なる幸福は極めて大となり、遂には人は引續ける苦難から殆ど無精不性に離れる程になることすらあり得る、蓋し『それが去れば同時に神の力とその不斷の近接と幫助との獨特なる感情——地上に於けるあらゆる他の幸福に勝れる、神の實在の眞實の感じ——も亦失はれるからである。』この感じは『魂の奥底に於ける靜かなる點』、『神に對する希望と確信との靜かに燃ゆる光であつて、この裡に在るとき、人は多くに堪へ得るのみならず、不幸のたゞ中に在つて幸福に感ずることすら出来るのである。』

されば、神に對する且つ道德的世界秩序に對する信仰なくしては幸福は無い。この

信仰ある人は、(シャル・スクレタンの語に従へば)『頭を天に置いて』生きてゐるのである。茲に於てか彼の信仰は最早「信仰」ではなく、知識であり、確信である。私——これを書いてゐる私であつて、ヒルティイではない——總じて、人が「信仰」と「知識」とを二つの根本的に、もしくは本質的に相異せる意識現象と見做す所以を理解しない。信仰は知識と同様に實際現存するものに就いて思辨的に若しくは經驗的に得られたる確信(Gewissheit)である、さうして唯その種類アイディアにおいて、恐らくは亦強さの程度に於て、兩者相互間の區別は存する。さうでなければ信仰は單なる意見マインツン、推察、恐らくは信賴に過ぎないであらう、然るにこれ等すべては思違ひ(Täuschung)を除外するものではなく又決して普遍的にして絶對的なる道德的並に宗教的價值を有することの出来ぬものである。——「頭を天に」置くとき、人間は永遠への展望を持ち、また一切の地上的なるものをば永遠の見地の下(sub specie aeternitatis)に觀るに至る。茲に於てか彼の人生の觀方が變つて來る、人間並に一切自



餘の生物に對する彼の態度も亦すべて變つて來る。――

永遠の見地に立つとき、人は有らゆる地上的事物をばその眞誠の價値に従つて評價する、即ちそれらを餘り重く視ずして瑣事は瑣事として顧みなくなる。『瑣事の、しかも特に世人とその批評との重視の爲に、最も善き人々の極めて多くが惱んでゐる、さうしてそれによつて彼等の日々の仕事をば、實際必要であるよりも遙か以上に苦勞多きものとする。』世間の、その『財寶』及び世人の、正當なる評價は一切の『賤しむべき出世主義』――現代の最も嫌忌すべき現象の一つなる――を不必要に、否、殆ど不可能にする、蓋しこれは畢竟事物の誤れる評價の結果に過ぎず、又それ自體に於ては無價値なる、しかし功名心と嫉妬とにより、虛榮心と所有慾とによつて眩まされ、欺かれた人々からは極めて價値多く視られてゐる事物の追求に外ならないからである。(幸福第一卷、二〇三、四頁。)

如何なる哲學も如何なる宗教も、基督教ほどに、暫有的なるものと永續的なるも

のとを立所に識別する斯くも確實な判断とかくも誤らざる眼光とを具へたものはない。世間がかくも多く實存的のものについて、現實主義や、實在性や、現實政策や、其他同種類のものについて語るに拘らず、しかもその實、眞に實有なるものに對しては全く何等の感覺をも有せず、今日では曾て見ざるほど熱心に諸々の幻想の實現に努めそして其中に彼らの幸福と救とを觀取してゐるといふことは、奇妙な事である――それが極めて悲しむべきことでなかつたならば、我らはそれを、笑ふべき事だ、と言ひたい。ヘルティは正當にも言つてゐる(眠られぬ夜、四月六日)、『人間社會の現狀において殆ど最も必要と見えるものは、實有なるものに對する一種の感じ(ein gewisser Instinkt für das Reelle)であつて、これは我らを警戒して、日毎に何れの教養ある人にも押來せ來る、而も實はその中でただ僅少部分だけが生存力を持つてゐるやうな、無數の企圖や、體系や協會や、黨派的煽動や、文學上並に政治上の潮流や、もしくは宗教的團體や宗派やに陥らしめぬものである。その最大多

數は極めて暫有的なもので、數度の叫喚か又は年報の後に消え失せるか、もしくは種々の、やはり同様に支柱なき分派に分裂するのである。貴君は出來得る限りそれらから離れてゐ給へ。』——『貴君は何等意義ある良結果を齎さないに拘らず、猶多くの時間と精神力とを要求する如き事柄から遠ざかつてゐ給へ。協會や、會議や、委員會や、講演（能動的意味に於いても、受動的意味に於ても）の大多數はこれに屬する。この種のもものが果して生存力を有し且つ良き影響を與へるものであるか（この場合には人はそれを支持せねばならぬが）、もしくは社會やまたは新聞紙上に名聲の揚らんことを欲する人々の單なる遊戯に過ぎないか、この事に對して貴君は正しき感じを獲得されねばならない』（眠られぬ夜、第二卷、七月十八日）。

すべての幻想の中で最も不幸なるものは現代に於ては恐らく、『社會問題』が眞誠の基督教、換言すれば基督教的爱以外のものによつて解決され得ると做すことである。かくてヒルティは、間もなく宗教問題が社會問題に取つて代りさうして亦それ

を解決するであらうと豫言してゐる。しかし其前に後者は無神論としてその全然支持すべからざる所以を示さなければならぬ（幸福第二卷、二九頁、註）。——社會主義を克服せんとする（獨り基督教を除いた）あらゆる對策は『善き意志を有する人々の自己欺瞞である、また社會主義的國家も、それが夢想さるゝ如く、最も廣く實現された曉には、一般的満足を齎しはしないであらう。——爾若し或る形の無益なる慈善事業を以て爾の生涯を失敗に終らしめることを欲しないならば、眞誠の基督教を促進すべく又、それに對して猶ほ存する偏見を克服すべく助力せよ。』人々が別人にならなければならぬ、さうすればその境遇も亦自ら變つて來る。而もこれは、獨り眞誠の基督教を活氣づけるとによつてのみ成就されるのである（眠られぬ夜、四月六日）。——『すべての文明國に於ける下層階級たる一般民衆が基督教及び總じて宗教的なるものから全然離反し去り、さうして今はただ一種の社會主義的未來國家からのみ彼らの境遇の改善を期待してゐることは、我等の時代の最惡なる現象に

屬する。彼等がこの點において欺かるゝは、彼等にとつては更に一つの不幸を加へる所以である。しかし改善は察するところ最初には先づ個々の國に於て始められなければならぬ。貧しき者、虐げられたる者にとつて考へ得べき最上の世界觀を含むものは正に基督教であるといふことを個々人に會得させること、これが今の教會や學校の任務であらう。然るにこれは兩者とも今まではただ不完全にしか果してゐない所である。』『單に日曜日の説教と宗教上の並に堅信禮のための教育とだけではこの事は遂げられない。だから我等の教會を一種のより活氣ある社會的組織に變更することは來らずして已むことが出來ない。之に反して僧侶が普通の社會主義に向ふ傾向は大なる過誤である。何故ならばそれは徹頭徹尾無神論的であり、又その故に祝福もなければ榮えも無い。然るに基督教は、外部からの何等かの添加も無くして、十二分に社會的要素を含んでゐる。されば貴君は、基督教的にして且つ社會的と自稱する、もしくは總じて基督教と今日の社會主義との結合を企圖するところ

ろのものは一切之を信じ給ふな』(眠られぬ夜、第二卷、五月六日)。

一體何れの善良なる公民且つ人間の友も、現今人生を動したまた困難にしてゐる重要な諸問題——社會、教育、人種、平和、婦人問題等——をば、それに對して他人が如何なる態度を執るかを顧みずして、彼の個人的、獨り彼のみに關する事に當て、考察しさうしてそれらをば第一に自分自身のために、自分の家庭で彼に最も近い周圍において解決すべき筈なのである。各個人は自分自身の務のみを顧念して、一般世間には恰も是等總ての『問題』と困難とが全然存在しないかの如くに生きよ。『世間は放つて置き給へ！』とヒルティは叫んでゐる——『人道や永遠の平和をそんなに多く口にし給ふな。——貴君は、貴君の逢ふ何れの人にも、何か好きことを祈られるか。』若し然りと答へられるならば、『其時には貴君は人道的にして友愛なる心を持つて居られる、』さうして有らゆる『問題』は貴君にとつては解決されたのである。『さうでない場合には之に反してそれは單なる空語であつて、議事堂には

適するが、我々には適しない、』——猶かくも多くのやつれ果てた婦人の顔や、荒々しい眼付をした襤褸を纏へる子供や、野獸のやうになつた大酒徒らが我等の「文明」國のあらゆる街上に在る間は、人はかくも多く國際會議に於て人道や諸國民間の永久平和を口にしてはならない筈である、それよりも各人は先づ自分の家に於て眞面目に秩序を齎すやうにすべきである。』凡そ基督者の責務は、自ら黨派の争の中に身を投ずることではなく、寧ろ唯『正しきものを示すこと及び自己の行爲によつて、眞誠の基督教は今も尙、是等の戦闘を脱出して救船に救ひ上げられんことを欲する破船者等を收容するために、生命と、効驗と力とに充ちて現存してゐることを證明することである。』(眠られぬ夜、第二卷六月八日、六月五日、七月十五日、四月二日参照。)

我々は現今の社會主義からは遠ざかつてゐようではないか！ 憎惡と嫉妬とがそれを産んだのである、それ自身がまた憎惡と嫉妬とに過ぎず、従つて世界に萬人對

萬人の戦を齎すが如くに。ヒルティは言ふ。「社會主義に於ける最も醜惡な點は——もう唯この點からだけでも私は決してそれに屬さうとは思はぬのであるが——それが實のところ嫉妬をば人間行爲の主動機となし且つ實行に於てもこれを家族の者に教へ込むことである。嫉妬と及び之と密接なる關係を有する他の不幸に對する意地悪き悦びとは然し吝嗇と共に未だ改善せられざる人間性の最惡なる性質である。遺憾ながら我らは、それが他の社會に於ても亦極めて屢々見られること及び國家自らその模範を示してゐることを附言せざるを得ない。——蓋し、彼らの現實政策 (Realpolitik) と呼ぶところのもの及び彼等を驅つて、常に互に注視しさうして如何なる膨脹にも嫉妬深き對抗努力を以て答へしむる所のものは、大規模に於ける嫉妬に外ならない。……その國家が日毎に已むを得ざる惡事且つ信賴すべき態度として宣言するところのものを、如何にして個々人が邪惡として認めさうして避くべき筈があらう！——所謂高等政策 (Grobe Politik) は基督教とは正に明白に矛盾するもの

であり、その代表者等は兎に角魂を二つ持つてゐなければならぬ——一つは私用のために、一つは公用のために。』（眠られぬ夜、第二卷、六月十七日。）

17  
2  
54

十一

フリードリッヒ・リユツケルト

Das Unsichtbare siehst du klar im Sichtbarn nur,

Und nichts im Sichtbarn als des Unsichtbaren Spur.

Rückert (Wesih. d. Brahm.)

見えぬものあらはにぞ見らる、見ゆるものうちにのみ、

さて見ゆるものうちには見えぬものの痕より外に何も見えじ。 リユツケルト(婆羅門の智慧)。

『私は神を信ずる！』これ美しき、賞讃すべき詞である。がしかし何處にまた如何に神が顯現するかを認識すると、この事が實は地上における淨福なのである。』ゲ  
ーテ以後の如何なる詩人も、私の觀るところでは、近代箴言詩の大家であり、古代東洋詩歌の匹儔なき翻譯家にして且つその創造的模擬者であり、最も驚嘆すべき、

喫驚度を失せしむる底の文辭並に押韻における巨匠であり、世界文學上のあらゆる詩形の絶對的支配者であり更に又——全然主觀的に言へば——近代詩人中の賢者であるフリードリッヒ・リッケルト以上に正當の理由を以てこのゲーテの詞を自身の上に適用することは出来ないであらう。

私を惹きつけるものは正にこの人の智慧である。さうして、私が『第二の智慧の書』〔ソロモンの智慧の書〕と呼べんと欲するところの、彼の智慧の書、『婆羅門の智慧』は常に私の座右に在る詩書に屬する。それは私の『袖珍祈禱書』であり、私の全然理解し且つ信ずると自白するところの唯一の宗教の、即ち基督教的汎神論の、眞個の福音書である。

この黄金書は今日ではたゞ少數の人によつて尊重せられ又繙讀されてゐるに過ぎない。即ち私の如く、既に老人であり且つ青年時代にも常に幾分古風な考と感じとを持つてゐた人達、單なる藝術よりも以上に大なる價値を有すると自ら考へると

ころの或物を更に藝術品の背後に求める如き人々、教訓文學の、特にアレクサンドル句格〔六脚の短長より成り、第三脚の後に Dikreuz の來る詩形〕の——私の觀るところでは箴言詩に極めて能く適するところの衣の——簡短なる形式の愛好者、人性及び藝術における『鬼神的なるもの』〔das Dämonische〕に對して餘り感じを持たぬ人達、最後には、靜寂な、靜觀的生活をば實際的な、外に向へるそれよりも一層高く評價し、さうして此世に於て到達し得べき最大幸福をば一切の人間との、自分自身と及び神との平和のうちに看取する如き人々によつて。

さればバルテルス（獨逸文學史第二卷、一〇三—一一一頁）が、リッケルトの思想抒情詩（Gedankenlyrik）に親しみそして其中に悅樂の源泉を見出し得る讀者にほゞ私の生れながらにして有する如き諸性質を豫想してゐるのは全く當を得てゐる。けれどもリッケルトを樂む爲には、人はシェークスピアやヘッペルやメーリケや又ゲーテを忘れねばならぬといふとは實際私の解するに苦しむ所である。然らば、例へ

ばミケランジェロ又はベートーヴェンを忘れずしては、リュイスダール又はローバート・フランツを樂み且つ更に進んでは前二者と同様に高く評價しまた歎賞することは到底不可能だと言ふのであるか。『忘れる』といふことが、ある他のその流風内では同様に偉大なる者に携はつてゐる間は、一方の藝術家のことを考へないといふ意味ならば、それは自明の事である。何人も、フランツの歌謠を聴いてゐる際には、第九交響樂のことを考へはしない、而もこの不可能は聽者にとつての幸福なのである。私がリニケルトを讀むとき、シェイクスピアとヘッベルとは勿論全然私の頭から消えてしまふ、それは前者が如何なる點においても後の二者に觸れず又彼等と比較し得ざる者だからである。メーリケに就いては私は此事をもうそれほど無條件的に主張することは出来ない、而もゲーテに就ては全然出来ない、否寧ろリニケルトは私をして他の如何なる大詩人よりも屢々ゲーテを想起せしめる。尤もそれは勿論老年時代のゲーテである。バルテルスも同じ事を言つてゐるのである。『あらゆる獨逸

詩人の中でフリードリッヒ・リニケルトは最も近く且つ最も直接にゲーテに、勿論老年時代のゲーテに結びついてゐる。』私がその枝を手にしてゐるとき、どうしてその幹に想到せずにならぬよう？

リニケルトは餘りに靜平であり、あまりに思想に富み、餘りに上品であり、あまりに冷やかで且つ反省的である、その戀愛詩や弔詩の最大多數においてすら、己が時代に起る事件に對して彼は本當の興味といふものを持たず、時代とは何等の生ける共鳴が無い、廣い範圍に互つて同精神の友を持ち得るには、彼は總じて餘りに脱俗的であり且つ敬虔である。彼の思念と生活とは、否彼の外貌にまでも言はゞ一種の時代外れの極印が捺されてゐる、青年時代には彼もまた一時は政治的戰争的氣分に、鬭争慾に、襲はれたが、これは決して上に述ぶるところと矛盾するものでは

なく、それがどんな風に表白されてゐるかを見るならば、むしろそれを裏書するものである。強ひてソネット〔十四行詩〕の形式に入れられた獨逸の戦争詩は、音楽の上で追復曲の形式（Fugenform）を採れる子守歌若しくは夜樂（Ständchen）が與へるであらうと想はれるのと同じ様な感じを私に與へる。凍えるやうな、堅苦しい、不自然な否滑稽な感じをすら與へるのである、たとひそれらがどれほど好い響を持つてゐても。而もそれだけのことすらリケルトの『鎧へるソネット』については言ひ得ぬのである。其中の或ものゝ如きは正に醜惡だと思ふ、しかも孰れの點よりするも最も醜惡なのは私の耳と私の感じにとつては序曲の最後のもの（第七）である、がしかしこれは詩人が、その好戰的熱狂なるものゝ單に不自然に——それが如何に不自然にして美しからざることよ！——作爲されたものであることを心ならずもナイーヴに告白したものととして極めて意味深きものである。

„Du Sprachbegabter, O Erzeugter Mains,  
Und all ihr, im Olympos Kronenträger,  
Du o Alkid, Herkles, Löwenjäger,  
All ihr Heroen Gräkins und Achais!  
Und ihr Erlesene vom Volk Judais,  
.....  
Und hohe Namen aus Thuiskons Hainen,  
Ihr Lieder eurer Barden, o Hermanne,  
Ihr Flammen eurer Krieger, o Thusnelden!  
Euch alle ruf' ich, daß ihr sollt erscheinen,  
Damit mein Volk zu Helden sich ermannne,  
Und ich, daß ich ein Sänger sei der Helden.“  
『汝詞才恵まれたる者よ、オライマイヤの子よ、  
また汝達すべて、オリュムポスの戴冠者よ、



おゝ汝アルキードよ、獅子獵人のヘラクレスよ、  
汝達すべてグレシヤとアヒヤイヤの半神達よ！

また汝達ユダヤの選ばれし者よ、

またトウイスコンの森より起りし高き名達よ、

汝達、汝達の歌手の歌々よ、おゝヘルマン達よ、

汝達、汝達の戦士の焔よ、おゝトウスネルダ達よ！

われ汝達皆を呼ぶ、汝達立ち顯はれよ、

わが民奮ひ立ちて勇士とならんため、

また我は、我は勇士達の歌手とならんため。」

(一) ゲルマン人の祖先、トウイスコンは(タキトウスの傳ふる所によれば)古獨逸人の祖である。

(二) 古ゲルマンの勇士。

(三) ヘルマンの妻。

かくも遠くからその好戰的愛國心を引つばつて來なければならぬ者は、正にそれ

を持つてゐないのである、且つこの凄じい誇張が若しリニケルトの口から出たのでなかつたならば、その中に愛國的抒情詩の嘲笑を看取することも出来るであらう。ところが詩人は極めて真面目に謂つてゐるのである、たゞ彼は本當の軍歌を歌ふにふさはしい、また例へばケルナーの『リニラ(七絃琴)と劍』を一貫して居りそして讀者を感激せしめ且つ引摺つて行くやうな調子を見出さないだけである。この調子はリニケルトの胸には正に全然缺けてゐる、而もそれは彼も亦自覺せる、かつ後年の作たる二つの詩(『わがソネット』及び『政治的詩歌の回顧』)に於て明言せるところである。彼はそのソネットが『翔つた』『不思議な様々の路』を顧み、さうして、彼が嘗て『兀鷹と共に戦の暴風の中で叫ぶ』ために、空中に昇つて行つた時には、彼は誤れる、彼の『生得の路』ならざる路の上にあつたことを悟る。彼の青年時代の詩歌は今や彼には『他人の舌で歌はれてゐるやうに——戲談に纏れる舌もてその口吻を真似ることは今なほ折々は面白く感ずるけれども——見えるのである。かの『回

願』は政治に對する離別狀である。詩人は、單に『誘惑』さるるがまゝになり、己が傾向と氣質とに反して、荒々しい戦陣の叫喚に唱和するに至つたこと、さうして今や『幼年時代と最初の世界との失はれたる二重樂園』に歸ることを言明してゐる。

358

„ . . . nur von Liebe will ich singen,

Die dieser Erden ödem Raum

Wo nicht ein Paradies kann bringen,

Doch eines Paradieses Traum.“ —

「……我はたゞ愛を歌はん、

この世の荒地に

たとひ樂園得もたらさずとも、

なほ樂園の夢もたらすものを。」 —

また憎んだり騒いだりする愛國心の口吻を『縋れる舌もて真似る』(nachhallen)

が如きは、もはや戯談の上ですら彼の爲すを好まざることである。がしかし祖國に對する温い眞摯な愛は常にその胸中に懐いてゐたところであり、また彼の青年時代の — 自由戦争時代の — 政治的理想には彼は世を終るまで忠實にして變らなかつた。例へば彼は — 既に老齡に達した頃(一八五一年) — その『詩的日記』に書いてゐる。

„Ich bin nicht krank, ich bin nicht matt,

Aber ich bin des Lebens satt,

Seit ich der Hoffnung mich begeben,

Ein neues Deutschland zu erleben.“ —

『われ病めるにもあらず、疲れたるにもあらず、

されど我は生に飽けり、

われ望すてよより、

新らしき獨逸國との。」 —

259

なほその青年期に屬する、「バルバロッサ」帝を頌へたかの周知の美しき歌（『時代詩』中の）は「往時の皇帝の榮光に對する獨逸國民の憧憬をば常に生々と保持して來た。これによつてリニケルトは、後年自由詩人（自由戰爭を）の合唱團に加つたりしたよりも一層多くその同胞を益したのである」（バルテルス）。——同じ部類に屬する猶二つの詩は、思ふに、その内容の故に此處に擧げられなければならない。それは即ち「衷なる平和」と「鄙に留れ」である。この二つの詩においてリニケルトの言へることの中には、それが百年前に通用したのに劣らず現にこの瞬間にも通用するやうなものがある。我等はたゞ二三の表白を變更するを要するのみである、さうしたならば是等の詩は、恰もやつと昨日ヒルティの陣營に屬する一人によつて書かれたかの觀を呈するであらう。

(一) 第一卷八八、八九、一二五、一二六頁。ペー・シュタインが序説を附して出版せる六卷より成れるリニケルト選集、ライプチヒ、レクラム。

『汎神論』に對する又少しでも汎神論との類似を示すか若しくは汎神論と解釋される虞ある一切の思想に對するヒルティの個人的嫌惡は、私には、何故にヒルティがリニケルトに對しても亦無頓著な態度を持するか、また、近世の獨逸詩人の中でリニケルトほど彼に近い者は一人も無いといふことに氣付かぬかの理由であるやうに思はれる。ヒルティを欺くものは、リニケルトが好んでその基督教的思想に著せてゐるところの汎神教的被覆に過ぎない、もしさうでなかつたならば彼は己が考方とこの詩人のそれとの間には大なる類縁が、屢々一致が存することを認めさうして、自身の見解を強めるために詩人の句を引用するといふ彼の賞すべき風は彼をして恐らく他の何れの詩人よりも屢々リニケルトに想到せしめたに相違ないであらう。然るに見るところ、彼はたゞ二度しかリニケルトを想起してゐないのである。『教育術

を論ずる書』（書簡集、一四八頁）に於て彼はシラ、ウーランド其他と並んで『部分的』にはリッケルトをも青年の讀物として推奨してゐる。また『幸福』（第二卷、一八六頁）に於ては彼は、リッケルトの名を擧げずして、その『世界と我』と題する詩の結尾を成せる、屢々引用される句「薔薇己を飾りなば、そは亦園をも飾るなり」を引いてゐる。ヒルティはこの句を前後の聯絡から切離してそれを『馬鹿く〜し』（abgeschmackt）と評してゐる。しかし全體から切離して見てもそれは毫も『馬鹿く〜しく』はない、否それ自らに於ても、寧ろ争ふべからざる眞理である。我等の高々言ひ得るところは、もし『薔薇』と『園』とが象徴的に解せらるべきであるならば、それには非常に違つた解釋をも下し得るといふこと位である。唯ヒルティがそれを解釋するに傾いてゐるやうな風にそれを解することは到底出來ない。また彼が斯かる解釋を下すことはやがて彼自らの最上の思想と忠言との一つを取消す所以である。この美しい罪のない句は慥に——而も特にリッケルトの口から出た

ものとしては——所謂『上流の一萬人』の排他的人生觀の辯護を含むものではない。リッケルトは、ヒルティの屢々繰返してゐるのみならず遂には更に進んで（眠られぬ夜、第二卷、六月八日の條に於て）活字の間をあけて〔和文ならば「園點を附し」印刷して」といふべきである。〕印刷させてさへゐるところと全く同じ事を言つてゐるのである。我等は既に次の詞を知つてゐる。「世間は放つて置き給へ」、我々の務は、正しきものを示すにあつて、世の争の渦中に身を投ずることではない！人々が別人に、より善く、ならなければならぬ。さうしたならば状態もまた變つて來、改善されるのである。各個人は、世間を顧慮せず、また往々世間に逆らつて、獨り自ら己に對して著手しなければならぬ。君が他に對して要求する諸性質を以て先づ君自らを飾れ、君の隣人も同じ事を爲せ、その隣人も同様に。茲に於てか個々人の『園』は次第く〜に飾られ、さうして最後には全世界が飾らるるに至るのである。——私は次の詩が如何にして別の意味に解釋せらるべきかを解するに苦しむ。

Welt und Ich.

„Wo auf Weltverbesserung

Wünsche kühn sich lenken,!

Willst du nur auf Wasserung

Deines Wissens denken?

Wenn man erst die Welt gemacht

Ganz zum Paradiese,

Komm't's von selber über Nacht

Auch an deine Weise.

Doch es muß zum großen Hort

Bei das Kleinste tragen;

Hast du nicht ein gutes Wort

Etwas mit zu sagen?

Auch das Wort ist eine That,

Wie sich mancher rühmet,

Und ein Hauch des Frühlings hat

Stets die Welt gebümet. —

Blühe, was da blühen mag,

Unter euren Hauchen,

Ich will meines Herzens Schlag

Für mein Leben brauchen.

Möge jeder still beglückt

Seiner Freunden warten!

Wenn die Rose selbst sich schmückt,

Schmückt sie auch den Garten.“ —

『雄々しくも世善くせんとの

願望起れるに、

汝はなどてたゞ汝が小草場に

水注ぐに専らなる。

全く世を先づ

樂園となしたらば、

來ん朝そはまた自ら

なが草場にも來りなん。

さはれ大いなる實得んには

いと小さき者も力致さでは叶はず。

いましは共に語るべき

よき詞持たずや。

阿も亦行なるぞ、

世の人の誇り言ふがごとし、

げに春の一息は

常に世に花咲かせけり。――

咲かんものは咲き出でよ、

汝達の息吹の下に、

我はわが心臓の鼓動をば

わが生のために用ゐなん。

人はみな心靜かに樂しみて

その悦を待てよかし！

薔薇己を飾るとき、

そは亦園をも飾るなり。――

世に力を貸すことの出来るのは、たゞ各人が彼自身の小範圍において眞の人間として又基督者として生きんと決心した時のみである。――

小さい自己の世界に、家庭に、關する詩をばリニケルトはその短き滑稽味ある詩の一つに於て『手製』の詩と呼び、また自分の詩をも其中に數へてゐる。

„Poesie, hausbackene,

Liefert meinen Hausbedarf,

Die sich dir, pausbuckene,

Freilich nicht vergleichen darf.

Sei du nur, pausbuckene

Kunst, in allen Lakten feil;

Diese schlichthausbackene

bleibe mein bescheiden Teil.

Einst noch zur hausbackenen

kehret ihr und seid gelobt,

Wann von der pausbuckenen  
Ihr verdorbene Magen laht.“

『手製の詩は

わが家の需要充す。

されどそは、誇り顔なる詩よ、

いかでか汝と肩並べ得ん。

誇り顔なる藝術よ、

汝はいづれの店にも賣られよかし。

この簡素なる手製の詩は

いつ迄もわがへりくだれる分たれ。

いつかは汝達も手製の詩に

歸り來てたのしめかし、

誇り顔なる藝術のため

胃の腑損ひたらんとき。』

この豫言が如何に眞であるかを私は私自身の上に経験した。私は未だ曾て本當に『胃の腑をこはした』ことはなく——高々時として溢れさせたことがある位のものであるが——私はなほ青年時代から好んでリニケルトを讀んでゐたのである。けれども老境に達した今始めて私は本當に彼の『手製』の智慧の中に這入つて感じたり考へたりすることが出来る。序ながら、私をしてこの智慧に赴かしめ又それを理解し且つ愛好せしむるものは單に私の年齢としだけではなく、同時に我等の生きてゐる時代である。

„Nord und West und Süd zersplittern,

Throne bersten, Reiche zittern:“

『北と西と南と裂け分れ、

王座破れ、國々オホクニ戦慄く。』

我等は動物状態と、血と、汚穢と且つ賤劣との中に沈みつゝある！ 未だ全く神を

忘れてしまはず、精神的並に道義的純潔と心の清淨感とに對してなほ多少の感じを心に失はぬ者は、最早この世に生きるに堪へない。彼は一切の現實から、自ら創り出したる空想世界に遁れるか、然らざれば『父祖の空気を味はんがために』又『ヒルザーの源泉』に這入り洗ひ淨めて若返らんがために、諸々の異邦文化の過去に遁れ、子供のやうな自由なる人達の方へ赴くのである。ところがリニケルトは最上の方を選び取つた。彼は神に充てる寂靜の裡に遁れ、そこで、『世を厭離し、たゞ神からのみ離れずして』、あらゆる人間的努力の地上的目的を達成するのである。その賢婆羅門がガンヂス河畔の遁世境シュイデライに於て考へ且つ教へる通りにリニケルトは、その所謂『小さな喜び樂しむ城にして、名譽の城且つ都』(Kleine Freudenfrohburg, Ehrenburg und Residenz)たるコーブルヒに近きノイゼスに生きる。其處では彼はその『追求したるものを成就し』、その『成さんとして努力したるものを達成した』のである。(その詩『ノイゼスとの訣別』參照。第三卷二一九、二二〇頁。)——トライチケは



言つて居る。リッケルトが幾時間も幾日もその園の花の間を歩き廻はつたり又は鳥の歌に聴き入つたり又は葡萄山の小舎の腰掛に倚つたりしたとき、その時彼には、家庭の些細な出来事も祖國の大なる戦と同様に、また彼の學者としての東洋語研究の成果も、その體驗したところは悉く詩となつたのである。彼は實際燕の囀るのや又樹の葉の囁きを聴いたのである、彼は宇宙の永へなる焰の心臓の上に生氣を失つて凋みゆく花と感<sup>じ</sup>を偕にする。彼の衷にはなほ幾分かかの遼たる太古の——ゲルマン人が嘗て、相戦ひまた互に奸計を弄し合ふ森の動物に耳傾けたあの太古の——人の持つてゐたやうな力強い自然感が生きてゐた、かつ彼は自然感を靈化して、正當にも人の基督教的汎神論と呼んだ一つの詩的世界觀となしたのである。

遠く世間の雜鬧を離れて、わが詩人はその胸の奥底に見出す、森の静けさの裡において彼は自然の神秘なる營いんかに耳を敬こてさうしてその息の中に又その聲のうちうちに、<sup>ヴェルトゲゼン</sup>世界歌の諧調の基づける音調を聴くのである。

„Tief im Walde saß ich

Und die Welt vergaß ich,

Die nie mein Gedacht;

Mich in mich versenkt' ich

Und mein Sinnen lenkt' ich

In des Daseins Schacht.

Welt, ich dein vergessen?

Erst dich recht besessen

Hab' ich fern von dir.

Wo du mir geschwunden,

Hab' ich dich gefunden

Inniger in mir.

.....

Draußen im Gewirre

Kann man werden irre,

Welt, an sich und dir;  
 Fern von deinem Rauschen  
 Kann ich dich belauschen  
 In mir selber hier.  
 Leise hör' ich flüstern  
 Jedes Blatt der Rüstern,  
 Jegliches Gefühl  
 Sich im Busen regen,  
 Wie die Winde legen  
 Sich im Laubgewühl.  
 Einen leisen Odem  
 Hör' ich, der den Brodem  
 Haucht hinweg vom Tag.  
 Du bist ohne Schleier,  
 O Natur, und freier  
 Geht mein Herzensschlag.

Durch des Waldes Stille  
 Tönt die Sommergrille  
 Und die Unk' im Sumpfe;  
 Lauter oder leiser,  
 Keine Stimm' ist heiser  
 Keine Stimm' ist dumpf.  
 Vor den Ton gefunder,  
 Der im Grund gebunden  
 Hält den Weltgesang,  
 Hört im lauten Ganzen  
 Keine Dissonanzen,  
 Lauter Übergang.  
 .....  
 .....  
 .....  
 .....  
 .....  
 Laß mich Anserkornen

Meinen blindgeborenen  
Bruder nicht verschmäh'n !  
Was der Maulwurf wühlet,  
Hat der Mensch gefühlet  
Oder eingesehn.  
Was der Vogel singet ;  
Was die Quelle springet,  
Was die Blume blüht,  
Was die Schöpfung rauschet,  
Mutter, nur belauschet  
Hab' ich dein Gemüth.  
Laß mich für die Erde  
Sinnen, daß sie werde  
Durch und durch verschönt !  
Laß mich sie verkären,  
Daß im Chor der Sphären

Sie mit Freude tönt ! (Waldstille. Bd. III. S. 201.)

『森の奥深くに在りて  
われは忘れけり、  
絶えてわが事思はざりしはを。  
我はわが衷うちに沈潜ちんぜんしき、  
さてわが思をば向けき、  
實在の奥深くへと。  
世よ、われ汝おまえを忘れしとや？  
初めてわれ汝を誠にわがものとしき、  
汝より遙か離れて。  
汝の我に消えしとき、  
われ汝を見出しき  
わが衷うちにいや親しく。  
.....  
外なる雑鬧の中にては、

世よ、人は自らにつき又汝につきて  
迷ふこともやあらん。

汝が騒はるか離れし

こゝなるわれ自らの内にこそ

なが聲はきこゆれ。

いとかすかにぞ我は聴く、

楡エドヒの葉の一つ／＼のさゝやきを、  
胸に起る

感じ皆を、

樹の葉の茂みのその中に

風の鎮まりゆく様を。

濃き霧を

光より吹き拂ふ

かすかなる息吹いぶきを我は聴く。

汝は血被ちまひもたず、

おゝ自然よ、さてわが心臓の鼓動は進む、

いや自由に。

森の静けさ通して

夏蟋蟀と

沼の蛙の聲ひびく。

高きも低きも、

一つの聲も嘎れならず、

一つの聲も沈鬱しんうつならず。

天地あめつちの調しらべをば

その本もとにて合せ支ふる

しらべ見出せし者は、

しらべ高き全體のうち

一つの亂れ音なみをもきかず、

たゞ移りゆきをぞ聴く。

.....